
千葉県船橋市

取掛西貝塚(5) I

2013

船橋市教育委員会

千葉県船橋市

とり かけ にし かい づか
取 掛 西 貝 塚 (5) I



空堀 (SI-002・003・004)



空堀 (SI-002)



SI-002動物骨集中箇所1



SI-002動物骨集中箇所2



SI-002動物骨集中箇所3



SI-002動物骨集中箇所4



SI-002動物骨集中箇所5

序 文

船橋市は、恵まれた自然環境とともに数多くの歴史的な文化遺産が存在しております。なかでも、200か所以上の包蔵地を数える埋蔵文化財は、旧石器時代から中近世にいたる歴史の厚みを物語っております。

このたび、宅地造成事業に伴う埋蔵文化財の記録保存を目的として実施して参りました取掛西貝塚（5）の成果を、発掘調査報告書Ⅰとして刊行することとなりました。

取掛西貝塚は船橋南部に位置する縄文時代早期・前期、平安時代にわたる遺跡です。今回の調査では、縄文時代早期・平安時代の竪穴住居跡などが検出され、特に縄文時代早期の竪穴住居跡からは現在のところ日本最古となるイノシシとシカを使った動物儀礼の跡が発見されました。

刊行にあたり、本書が学術資料としてはもとより、文化財の保護・普及のため、広く活用されることを願っております。

平成25年3月

船橋市教育委員会
教育長 石 毛 成 昌

凡 例

1. 本書は千葉県船橋市飯山満町1丁目1381番2ほかに所在する取掛西貝塚（5）Iの発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社レオ・コーポレーション代表取締役吉村典久の委任を受け、船橋市教育委員会生涯学習部文化課が実施した。
3. 船橋市教育委員会 調査組織
船橋市教育委員会
石毛成昌 教育長
高橋忠彦 生涯学習部長（平成23年4月1日～）
武藤三恵子 文化課長
新宮秀則 課長補佐（平成23年4月1日～）
高橋健一 文化課埋蔵文化財調査事務所長（平成23年4月1日～）
調査事務所員
石坂雅樹、小林理恵、池田善彦、小中美幸
（調査員：非常勤職員）高岡実、加藤元康（平成24年4月1日～）
中村宣弘 文化課文化財係長
文化財係員
伊藤悟（平成23年10月1日～）、道上文、白井太郎、
大澤美怜（平成23年4月1日～）
4. 発掘作業は船橋市教育委員会が大成エンジニアリング株式会社に委託し、整理作業を船橋市教育委員会埋蔵文化財調査事務所が行った。
5. 大成エンジニアリング株式会社
古川 健 代表取締役
蒲 明男 調査員研究員
6. 発掘作業は大成エンジニアリング株式会社の蒲 明男が調査担当者（代理人）、船橋市教育委員会の石坂雅樹が主任検査員を担当した。
発掘調査及び整理作業は下記のとおり実施した。
発掘調査 平成20年度 平成20年6月2日～平成20年7月30日
整理作業 平成21年度 平成21年4月1日～平成25年3月29日
7. 委託業務では中間検査として、遺構検出確認及び遺構配置略図検査・図面検査・空中撮影前発掘作業終了確認検査・発掘作業終了確認検査・調査結果図等の成果品検査・注記作業確認検査・出土遺物の成果品検査、完了検査として図面等の成果品検査を実施した。
8. 本書の執筆は第Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ章を石坂雅樹、第Ⅲ章を国立歴史民俗学博物館教授西本豊弘・石坂雅樹、第Ⅳ章を中央大学准教授小林謙一・徳島大学埋蔵文化財調査室遠部慎が担当し、編集は石坂が行った。遺物写真撮影ならびに遺物図版作成は沼野健一（非常勤職員）、第2原因ならびに挿図作成は吉田貴子（非常勤職員）の協力を得た。

9. 調査および本書を作成するにあたり、次の方々にご指導・ご協力を賜った。
阿部芳部、大内千年、金憲硬夷、工藤雄一郎、坂本稔、杉原重夫、樋泉岳二、戸田哲也、浪形早季子、原田昌幸、堀越正行、松崎浩之、宮川博司、村田六郎太（五十音順）
10. 本書で使用した地形図は下記のとおりである。
- 第2図 (財)日本地図センター発行 第一軍管地方二万分一迅速図原図復刻版
「千葉県下総国東葛飾郡船橋驛近傍村落」
- 第3図 国土地理院作成 船橋、習志野 1/25,000
- 第4図 船橋市役所発行 船橋市22・23・28・29 1/2,500
11. 遺構挿入中、方位は座標北を示し、標高は各セクションポイント横に表示した。
12. 遺構図の縮尺は以下を基本とし、スケールを各図に表示した。
- 縦穴住居跡・土坑・ピット 1/40 カマド 1/20
溝状遺構 1/80
13. 遺構の種類別にアルファベットでコードを付した、コードは下記のとおりである。
- 縦穴住居跡 SI 土坑 SK
溝状遺構 SD ピット SH
14. 観察表のうち、法量の現存値は〈 〉、復元による推定値は()で示し、調整の語句は編集の都合上省略してある。また、色調については、『新版 標準土色帖（1988年版）』（農林水産省農林水産技術会事務局監修）による。
15. 挿入図に使用したスクリーントーンの用例は下記のとおりである。

遺構 焼土  貝ブロック 

本文目次

I はじめに	1
1. 調査の概要	1
2. 遺跡の位置と環境	1
II 検出された遺構	11
1. 概要	11
2. 竪穴住居跡	11
3. 土坑	29
4. ビット	42
5. 溝状遺構	62
6. 第II章のまとめ	63
III 取掛西貝塚の動物遺体について	68
1. はじめに	68
2. SI-002竪穴住居跡骨集中の動物遺体出土の動物遺体	68
3. SI-002竪穴住居跡骨集中以外の動物遺体	71
4. SI-002竪穴住居跡以外の動物遺体	75
5. 第III章のまとめ	75
IV AMS法による年代測定	81
1. 船橋市取掛西貝塚（5）出土試料の ¹⁴ C年代測定	81
2. 船橋市取掛西貝塚（5）貝類の年代測定	85
3. 第IV章まとめ - 船橋市取掛西貝塚（5）出土試料の ¹⁴ C年代測定結果について -	92
V 総括	96

挿 図 目 次

第1図	取掛西貝塚グリッド展開図	2	第23図	土坑 (SK) (2)	35
第2図	遺跡の位置と周辺の地形	3	第24図	土坑 (SK) (3)	38
第3図	周辺の主な遺跡	4	第25図	土坑 (SK) (4)	41
第4図	取掛西貝塚調査地点図	7	第26図	ピット (SH) (1)	46
第5図	確認調査結果図	9	第27図	ピット (SH) (2)	51
第6図	遺構配置図	10	第28図	ピット (SH) (3)	56
第7図	SI-002 (1)	12	第29図	ピット (SH) (4)	60
第8図	SI-002 (2)	13	第30図	SD-007	63
第9図	SI-002炉跡	15	第31図	市内検出縄文時代早期竪穴住居跡 (1)	65
第10図	SI-003	16	第32図	市内検出縄文時代早期竪穴住居跡 (2)	66
第11図	SI-004 (1)	18	第33図	SI-002動物骨集中箇所微細図	69
第12図	SI-004 (2)	19	第34図	CNFBT-C1 較正年代確率密度分布	83
第13図	SI-006	21	第35図	CNFBT-C3 較正年代確率密度分布	83
第14図	SI-008A・009、SK-008B・008C	23	第36図	取掛西貝塚の較正年代	87
第15図	SI-010	24	第37図	関連資料の炭素14年代測定値 (calBC)	88
第16図	SI-011	26	第38図	灰床炉出土ミズキ (TKN-S-1)	94
第17図	SI-012	26		測定結果の較正年代確率分布	94
第18図	SI-015	27	第39図	測定試料出土層位	94
第19図	SI-001	28			
第20図	SI-001カマド	29			
第21図	SK-005・114	31			
第22図	土坑 (SK) (1)	32			

表 目 次

表1	周辺の主な遺跡一覧表	5	表11	SI-002貝層出土鳥骨数量表	74
表2	SI-002ピット計測表	14	表12	SI-003出土獣骨数量表	76
表3	SI-002炉跡ピット計測表	15	表13	SI-004出土獣骨数量表	77
表4	SI-003ピット計測表	16	表14	SK-005出土獣骨数量表	78
表5	SI-004ピット計測表	20	表15	SI-003出土鳥骨数量表	78
表6	SI-006ピット計測表	22	表16	SI-004出土鳥骨数量表	79
表7	SI-010ピット計測表	24	表17	SK-005出土鳥骨数量表	80
表8	SI-011ピット計測表	26	表18	取掛西貝塚の ¹⁴ C炭素年代 (BP)	86
表9	SI-002動物骨集中箇所出土獣骨数量表	72		と暦年較正年代 (calBC)	86
表10	SI-002貝層出土獣骨数量表	73	表19	測定試料一覧表	92

図 版 目 次

- 巻頭図版1 空撮 (SI-002・003・004) /空撮 (SI-002)
- 巻頭図版2 SI-002動物骨集中箇所1/SI-002動物骨集中箇所2/SI-002動物骨集中箇所3/SI-002動物骨集中箇所4/SI-002動物骨集中箇所5
- 図版1 SI-002完掘状況/SI-002⁴跡検出状況/SI-002⁴跡完掘状況/SI-002動物骨集中箇所1/SI-002動物骨集中箇所2
- 図版2 SI-002貝層検出状況/SI-002動物骨集中箇所検出状況
- 図版3 SI-003完掘状況/SI-003貝層検出状況
- 図版4 SI-004完掘状況/SI-004貝層検出状況
- 図版5 SI-004遺物出土状況/SI-006、SD-007完掘状況
- 図版6 SI-008A、SK-008B・C、SH-151完掘状況/SI-008A、SK-008B・C遺物出土状況1
- 図版7 SK-008B遺物出土状況2/SI-009、SH-069完掘状況
- 図版8 SI-010、SK-014・016完掘状況/SI-011、SH-058・059・169～171完掘状況
- 図版9 SI-012完掘状況/SI-015完掘状況
- 図版10 SI-001完掘状況/SI-001掘り方
- 図版11 SK-005・114完掘状況/SK-005・114遺物・貝層検出状況/SK-013遺物出土状況/SK-016完掘状況/SK-026完掘状況/SK-028遺物出土状況/SK-060完掘状況/SK-080完掘状況
- 図版12 SK-131完掘状況/SK-131遺物出土状況/SK-172完掘状況/SK-172遺物出土状況/SK-047完掘状況/SK-161完掘状況/SK-122完掘状況/SH-138他完掘状況
- 図版13 調査区北西側完掘状況 (SH-156他) /SD-007完掘状況 (SH-021他) /調査区中央部完掘状況1 (SH-159他) /調査区北側完掘状況 (SH-146他) /調査区南側完掘状況 (SK-107他) /調査区中央部完掘状況2
- 図版14 動物骨集中箇所のイノシシ頭蓋骨1
- 図版15 動物骨集中箇所のイノシシ頭蓋骨2 (0536)
- 図版16 動物骨集中箇所のイノシシ頭蓋骨3
- 図版17 動物骨集中箇所のシカ
- 図版18 SI-002貝層出土のイノシシ
- 図版19 SI-002貝層出土のシカ
- 図版20 SI-002貝層出土の中型獣
- 図版21 SI-002貝層出土の鳥類
- 挿図写真1 CFBFT-C1出土状態1
- 挿図写真2 CFBFT-C1出土状態2
- 挿図写真3 CFBFT-C3出土状態1
- 挿図写真4 CFBFT-C3出土状態2

I はじめに

1. 調査の概要

調査の経過 平成20年2月29日付けで、株式会社レオ・コーポレーション代表取締役吉村典久より宅地造成のため、船橋市飯山満町1丁目1381番2ほか（1976.16㎡）について、文化財保護法（以下、「法」）第93条第1項に基づく届出が船橋市教育委員会生涯学習部文化課（以下、市文化課）に提出された。届出のあった土地は周知の埋蔵文化財包蔵地である取掛西貝塚に含まれており、また周辺地域においても発掘調査が実施され（取掛西貝塚（4））、当該地も遺構の分布が広がっていると判断されるため、市文化課は当該事業地全域の発掘調査が必要な旨を千葉県教育委員会に進達、法第93条第2項に基づき千葉県教育委員会は発掘調査が必要な旨を通知した。これを受けて市文化課と事業者が協議を行い、法第99条第1項に基づき確認調査を行う事となった。確認調査は平成20年3月4日から平成20年3月17日にかけて実施した。その結果、攪乱をうけている南側の177.41㎡を除く1798.74㎡について、協議が必要な旨を事業者に通知した。その後、事業範囲が1757.70㎡に変更（一部除外）になり、協議対象範囲が1622.06㎡に変更になった。再度、市文化課と事業者の間で協議を行い、記録保存のため472.19㎡（保存区域1149.87㎡）の発掘調査を行う事で合意し、法第99条第1項に基づき平成20年6月2日から平成20年7月30日まで本調査を実施することになった。現場での発掘作業は船橋市教育委員会が大成エンジニアリング株式会社に委託し行なった。

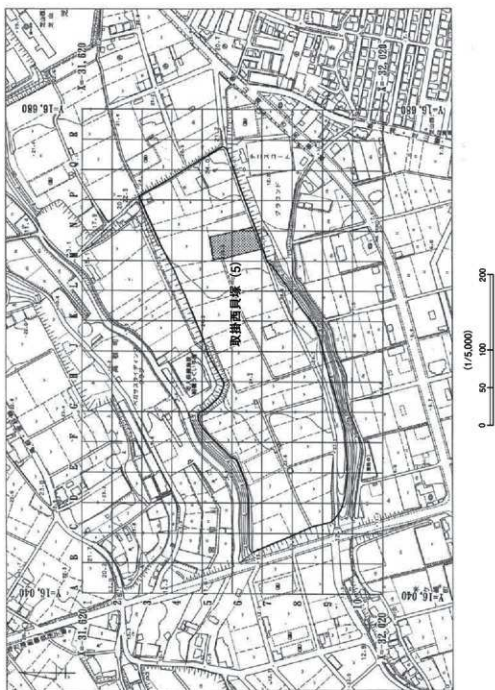
調査の方法 調査区のグリッドについては、取掛西貝塚を覆うように国家公共座標（第IX系）を使用し40m方眼の大グリッドを設定した。更にその中を4m四方の小グリッド（00～99）に分割し使用した（第1図）。今回の調査地点は、このうち10Z・10aにまたがる区域に位置している。

重機による表土除去後、人力による精査をした結果、縄文時代早期前半の竪穴住居跡10軒・土坑45基・ピット114基・包含層1箇所、縄文時代前期の土坑墓1基・焼土跡1基、平安時代の竪穴住居跡1軒、平安時代以降の溝状遺構1条を検出した。遺構番号は遺構の種類に関係なく、001から順に付した。基本的に遺構の調査では、竪穴住居跡・カマドは十字、溝状遺構は任意に土層観察用のセクションベルトを設け、また、ピットは半截して土層の観察を行い、必要なものについて図面を作成し完掘した。

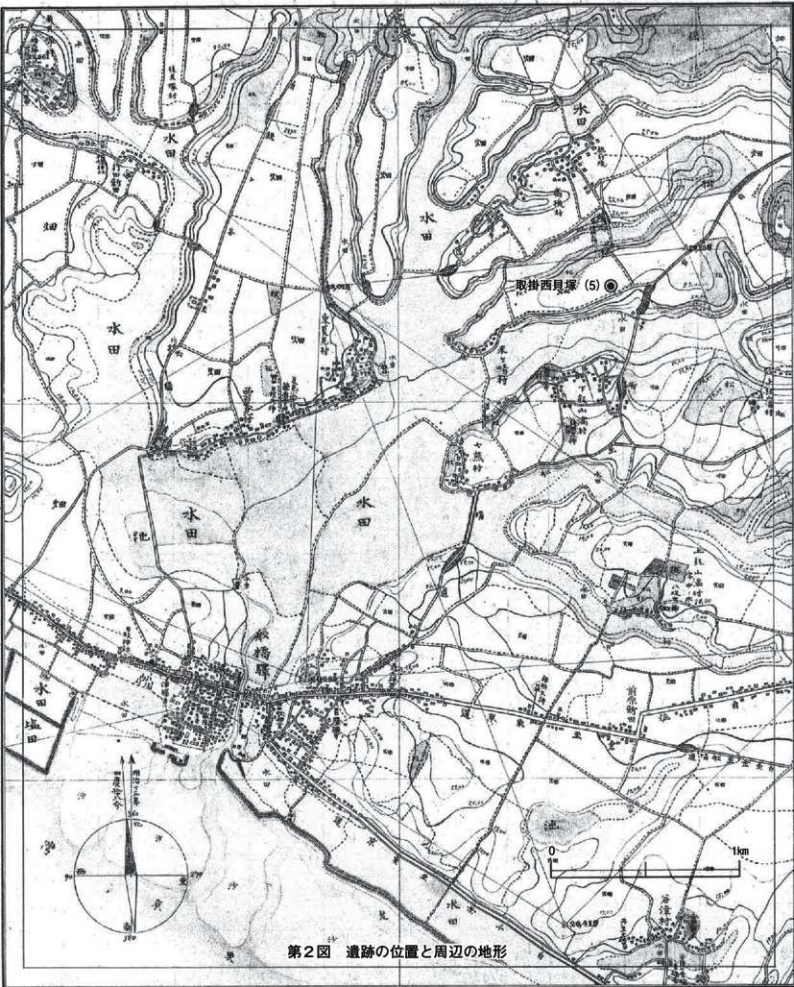
2. 遺跡の位置と環境

取掛西貝塚（5）は、船橋市の南部である船橋市飯山満町1丁目、米ヶ崎町に所在する。本遺跡は、東京湾に注ぐ海老川の支流である宮前川と同じく海老川の支流である飯山満川によって開析された、西側に伸びる南北約0.65km、東西約1.8kmの台地上に立地している（第2図）。

周辺の遺跡では、同じ台地上の東側に縄文前期の取掛貝塚が存在していたが現在は土取により煙滅している。その南東側には縄文時代早期～中期の飯山満東遺跡が位置し、昭和47年の調査で縄文時代前期の土坑群、縄文時代前期・中期の竪穴住居跡などを検出している。また、取掛西貝塚と同じ台地上の西側には米ヶ崎城跡が位置するが取掛貝塚同様土取により煙滅している。



第1図 取掛西員塚グリッド展開図



第2図 遺跡の位置と周辺の地形

(今十五)驛橋船 尺、一分方二 離車等ノ突米五



第3図 周辺の主な遺跡

表1 周辺の主な遺跡一覧表

No	遺跡名	種別	時代	No	遺跡名	種別	時代
1	取掛西貝塚	貝塚・集落跡	縄早・前	43	高部遺跡	集落跡	縄中
2	後貝塚	貝塚・集落跡	縄中・後	44	細田遺跡	包蔵地	縄早
3	西の台遺跡	集落跡	旧、縄早～中、古前	45	沢之台遺跡	集落跡	縄前・中期
4	土手際遺跡	牧跡	近	46	薬門台北遺跡	集落跡	縄中
5	野馬土手	牧跡	近	47	薬門台貝塚	貝塚・集落跡	縄中・後
6	海老ヶ作遺跡	包蔵地	縄中	48	滝台貝塚	貝塚	縄中・後
7	海老ヶ作貝塚	貝塚・集落跡	縄中・後	49	宮下田遺跡	集落跡	縄前・前、中、近
8	宮前遺跡	集落跡	縄中・後	50	スルギ松遺跡	集落跡	縄前・中、弥後～古、中、近
9	金杉城跡	城館跡	中	51	飯山溝遺跡No.4	集落跡	旧、縄早、古前
10	オオラント塚	塚	中、近	52	天沼遺跡	包蔵地	古、奈、平
11	南畑込遺跡	包蔵地	縄中・後	53	竹之越遺跡	包蔵地	古
12	立場遺跡	集落跡	縄期～後、弥後、古、平	54	船橋御殿	集落跡・城館跡	古前、近
13	高木遺跡	包蔵地	縄前・中、弥、中、近	55	船橋城	城館跡	中、近
14	南三咲シ見塚	塚	中、近	56	宮本六丁目所在塚	塚	中、近
15	前貝塚堀込貝塚	貝塚・集落跡	縄前～後	57	峠台遺跡	道路跡・井戸跡	中
16	辺田台遺跡	集落跡	縄前、古前～後	58	西福寺境内遺跡	墓跡	中
17	北本町二丁目遺跡	包蔵地	旧、縄中	59	カネンド塚	塚	中、近
18	北台北遺跡	集落跡	縄早、古後	60	峠台古墳	古墳	古
19	北台北南遺跡	集落跡	古後	61	宮本台遺跡群	貝塚・集落跡	縄中・後、古中～平、中
20	笹塚古墳	古墳	古	62	七熊庚申塚	塚	中、近
21	八栄北遺跡	集落跡	縄早・前、古後、平	63	東町遺跡	包蔵地	弥後、古後、平
22	夏見台西遺跡	包蔵地	縄早・前	64	台畑遺跡	集落跡	縄早・中、弥後、古中～近
23	夏見台遺跡	集落跡	旧、弥後、古～平、中	65	子の神遺跡	包蔵地	縄早、古～平
24	夏見城跡	城館跡	中、近	66	川ノ上遺跡	集落跡	縄中・後
25	夏見古墳	古墳または塚	古	67	大日塚古墳	古墳	古
26	夏見大塚遺跡	集落跡	弥、古前・後～平	68	上飯山溝遺跡	包蔵地	旧、縄早・中
27	花輪塚古墳	古墳	古	69	飯山溝西遺跡	集落跡	縄中
28	上高根貝塚	貝塚	縄後	70	上ホシ遺跡	集落跡	縄早・中
29	高根城跡	城館跡	中、近	71	西殿河台遺跡	集落跡	弥、古～中
30	つい七台貝塚	貝塚・集落跡	縄中、中世	72	中殿河台遺跡	包蔵地	中、近
31	唐沢台貝塚	貝塚	縄中	73	東殿河台遺跡	包蔵地	縄中、古、中
32	米ヶ崎城跡	城館跡	中	74	新山貝塚	貝塚・集落跡	縄早・中、中
33	米ヶ崎遺跡	包蔵地	縄早	75	中野木台遺跡	集落跡	縄早・中
34	取掛貝塚	貝塚	縄前	76	新山遺跡	集落跡	縄早・中・後
35	飯山溝東遺跡	集落跡	縄早～中	77	新山東遺跡	集落跡	縄中・後
36	上飯山溝南貝塚	貝塚・集落跡	縄中	78	中野木向遺跡	集落跡	縄早、平
37	高根シシ見塚	塚	中、近	79	佐倉道南遺跡	集落跡	旧、縄早・前・中
38	古和台台遺跡	集落跡	縄前・中	80	中郷遺跡	集落跡	縄中
39	飯山溝古墳	古墳	古	81	大仲台遺跡	包蔵地	旧
40	高根木戸北貝塚	貝塚・集落跡	縄中	82	外原遺跡	集落跡	縄早～後、古前・中、平
41	高根木戸遺跡	集落跡	縄中	83	藤崎台遺跡	集落跡	縄早
42	飯山溝遺跡	包蔵地	旧、縄早、古前				

旧：旧石器時代 縄：縄文時代 弥：弥生時代 古：古墳時代 奈：奈良時代 平：平安時代 中：中世 近：近世

北側の宮前川を隔てた台地上には縄文時代後期の土高根貝塚、縄文時代中期の唐沢台貝塚、同じく縄文時代中期のつじ台貝塚が位置している。このうち平成16年に調査を行った、つじ台貝塚からは縄文時代中期の小竪穴が検出されている。

南側の飯山満川を隔てた台地上には縄文時代中期の飯山満西遺跡・上飯山満遺跡、縄文時代中期～後期の川ノ上遺跡、縄文時代早期、奈良・平安時代の子の神遺跡、縄文時代早期～前期、弥生時代後期、古墳時代中期・後期、中世の台畑遺跡、弥生時代後期、古墳時代前期・後期、平安時代、中近世の東町遺跡、縄文時代早期・中期・後期の上ホシ遺跡が位置している。このうち平成14年に調査を行なった、台畑遺跡(4)からは古墳時代中期の石製模造品工房跡などが検出されている。また、平成18年に調査を行なった、上ホシ遺跡(5)からは包含層中を中心に630点を超える燃糸文系土器が出土している。

更に南側の台地上には縄文時代中期～後期、古墳時代中期～後期、奈良・平安時代の宮本台遺跡群が位置する。昭和44年に行なわれた宮本台遺跡第1次調査では縄文時代後期前半の竪穴住居跡、合葬人骨が出土した土坑墓などが検出されている。

西側の海老川を隔てた台地上には縄文時代前期、古墳時代後期の竪穴住居跡などを検出した八栄北遺跡、旧石器時代の石器集中地点、縄文時代早期の炉穴、弥生時代後期の竪穴住居跡、古墳時代中期・後期の石製模造品工房跡・竪穴住居跡、奈良・平安時代の竪穴住居跡、中世の台地整形区画などを検出した夏見台遺跡、弥生時代後期の竪穴住居跡・方形周溝墓、古墳時代後期の竪穴住居跡、中世の台地整形区画などを検出した夏見大塚遺跡、中世城跡の夏見城跡、笹塚古墳、夏見古墳、花輪塚古墳が位置している(夏見台遺跡群)。

更に長津川を隔てた西側台地上には、北から縄文時代前期・中期の前貝塚掘込貝塚、縄文時代前期、弥生時代後期、古墳時代前期～後期の辺田台遺跡、縄文時代早期、古墳時代後期の北台次遺跡、古墳時代後期の北台次南遺跡、縄文時代早期・前期、古墳時代後期の飛ノ台貝塚、古墳時代中期の宝塚遺跡が位置する。このうち辺田台遺跡からは平成15年の調査で古墳時代中期の石製模造品工房跡、北台次遺跡からは平成12年の調査で縄文時代早期後半の炉穴、市指定史跡である飛ノ台貝塚ではこれまでの調査で縄文時代早期後半の竪穴住居跡・炉穴・土坑墓、前期の竪穴住居跡、古墳時代後期の竪穴住居跡、宝塚遺跡では平成11年の調査で古墳時代中期の石製模造品工房跡などが検出されている。

また、更に西の海神台西遺跡からはこれまでの調査で旧石器時代の石器集中箇所、古墳時代後期の方形区画墓・竪穴住居跡、平安時代の竪穴住居跡などが検出されている(第3図)。

取掛西貝塚は、今回の調査地点を含めて5地点で調査を行っている。平成11年度に調査を行なった(1)調査地点は遺跡の北東端に位置し、縄文時代前期の土器片が出土したが遺構は検出されなかった。平成15年度に調査を行った(2)調査地点は遺跡の南東端に位置し、縄文時代前期の竪穴住居跡2軒、土坑22基を検出し、縄文時代早期・前期の遺物が出土した。平成16年度に調査を行った(3)調査地点は遺跡の南東側、今回の調査地点の約40m東に位置し、縄文時代前期の竪穴住居跡1軒、土坑18基を検出し、縄文時代早期・前期の遺物が出土した。平成18年度に調査を行った(4)調査地点は遺跡の南東側、今回の調査地点の約20m東に位置し、縄文時代前期の竪穴住居跡7軒、縄文時代早期・前期の土坑34基・ピット303基を検出し、縄文時代早期・前期の遺物が出土した。今回の調査地点もこれまでの調査地点同様、遺跡の南東側に位置し、縄文時代前期を中心とした遺構の検出が予測された。そして、確認調査においても竪穴住居跡などの遺構は前期が中心で、縄文時代早期の包含層が北側を中心に広がっているという認識であった。

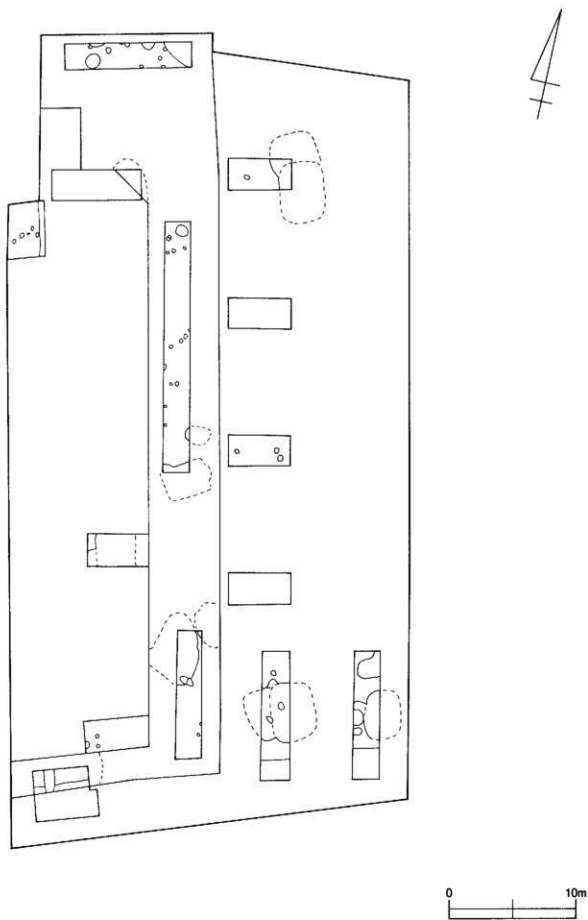


第4図 取掛西貝塚調査地点図

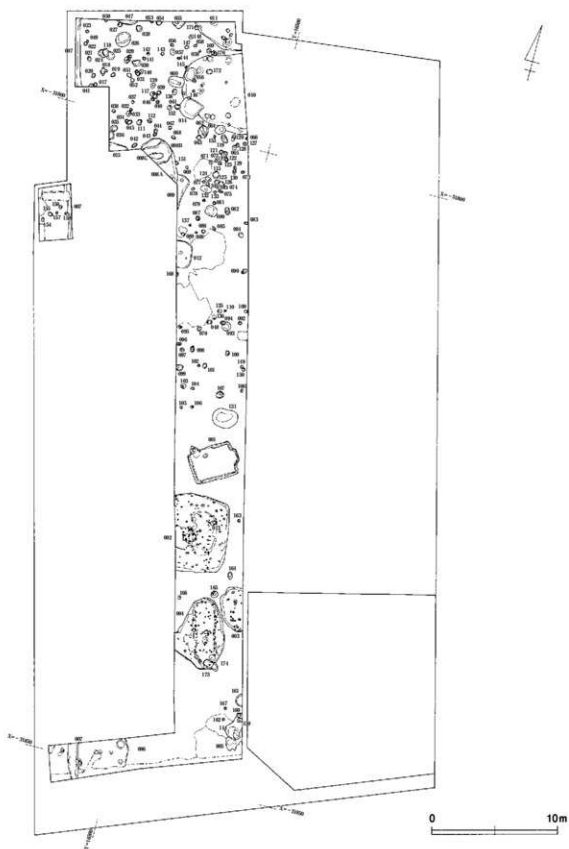
しかし、調査を進めるうちに縄文時代早期の遺物包含層は南端付近を除きほぼ全域に広がり、遺構は縄文時代早期前半が主体であることがわかった。

参考文献

- 八幡一郎ほか 1974『宮本台Ⅰ・Ⅱ』船橋市教育委員会
- 古内茂・清藤一順 1976『飯山満東遺跡』財団法人千葉県都市公社
- 金子浩昌ほか 1976『飛ノ台貝塚発掘調査概要』飛ノ台貝塚発掘調査団
- 千葉県教育委員会 1997『千葉県埋蔵文化財分布地図（1）—東葛飾・印旛地区（改訂版）—』
- 小林理恵・小中美幸 2000『平成11年度 船橋市内遺跡発掘調査報告書』「宝塚遺跡」船橋市教育委員会
- 白井太郎 2001『北台次遺跡』扶桑レクセル株式会社・財団法人船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター
- 石坂雅樹 2003『平成8年度～平成11年度 船橋市発掘調査報告書』「宝塚遺跡（2）」船橋市教育委員会
- 石坂雅樹 2003『平成8年度～平成11年度 船橋市発掘調査報告書』「取掛西貝塚」船橋市教育委員会
- 白崎智隆 2008『上ホシ遺跡（5）』株式会社コスモスイニシア・船橋市教育委員会
- 道上文 2003『台畑遺跡（4）』社会福祉法人聖進會・船橋市教育委員会
- 栗原薫子ほか 2004『平成15年度 船橋市内遺跡発掘調査報告書』「取掛西貝塚（2）」船橋市教育委員会
- 小中美幸 2008『取掛西貝塚（4）』京業エステート株式会社・船橋市教育委員会



第5図 確認調査結果図



第6図 遺構配置図

II 検出された遺構

1. 概要

今回の調査では調査区のほぼ全域から縄文時代早期前半の遺物包含層・遺構が検出された。覆土に貝層を伴うものは調査区南側に集中しており、北側から検出された遺構には覆土中に貝層を伴うものは見られなかった。これまでの調査のように縄文時代前期の堅穴住居跡は検出されず、土坑墓・土坑・焼土跡のみであった。また、調査区中央部付近から平安時代の堅穴住居跡が今回の調査で初めて検出された。

2. 堅穴住居跡

i. 縄文時代

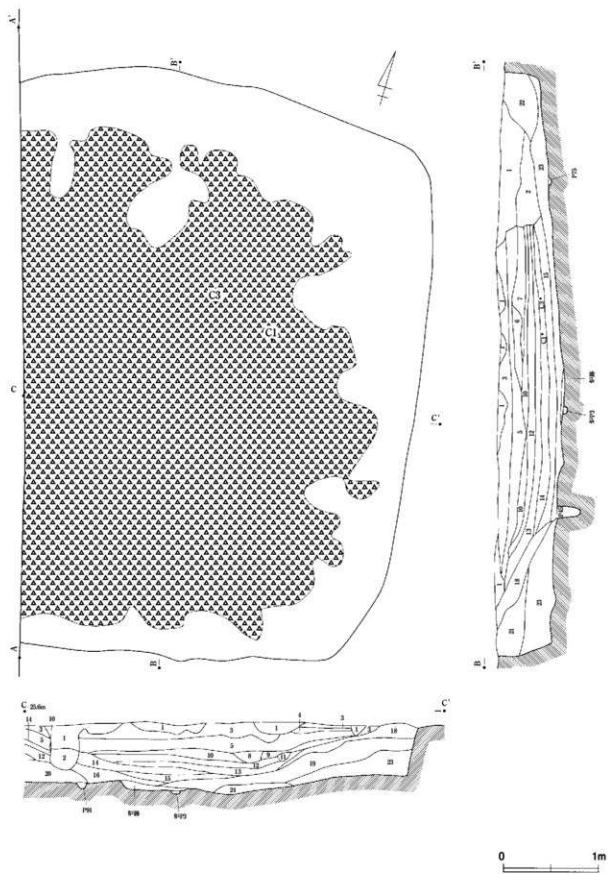
SI-002 (第7～9図、図版1・2・18～21)

調査区はやや南側、6M14～16・24～26・35・36グリッドに位置する。西側約1/3は調査区域外であり、SK-013(土坑墓：新)と重複する。確認面は表土下約15cmであったが作物による部分的な攪乱だけで残存状況は非常に良好であった。覆土の堆積状態はまず、中央部と壁際に黒・暗褐色土(第21・23層)が三角状に堆積し、その後計16層にわたるヤマトシジミを主体とする混土貝層(ほぼ純貝層)・混貝土層と灰層が堆積していた。このヤマトシジミを主体とする貝層は最大で約75cmの厚さを測る。

平面プランは南北約6m、東西4.2m(検出範囲内)の隅丸方形を呈すると考えられる。壁はⅡ層中からはほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は検出面で30～58cmを測る。壁溝は検出されなかった。床面は直床であり、炉跡を中心に一段低く(約1～18cm)になっており、硬化していた。ピットは調査範囲内で106基(径3～33cm、深さ5～62cm：表2)検出された。

炉跡は中央付近やや南側に設けられていた。五角形を呈し、69×68cm、深さ2～9cmを測る。また、周縁部を中心に10基(径4～20cm、深さ3～22cm：表3)のピットが検出された。底面はほとんど被熱部分が認められなかったが、覆土中には炭化物・灰を含んでいた。この炭化物の中にはミズキの炭化種子1点が含まれており、AMS年代測定法により8490-8307cal BC(85.0%)の年代が計測された(第IV章参照)。

遺物は貝層部分を中心に大量の縄文時代早期前半の土器・動物骨・ツノガイ製貝製品などが出土した。縄文時代早期前半の土器では三浦半島に分布の中心地域がある大浦山式土器が出土した(土器に関してはⅡ 遺物編にて詳細を報告する)。動物骨のうち獣ではイノシシ・タヌキ・シカ・ウサギ・キツネ・テン・サル・アナグマ・ムササビがみられた。鳥ではキジ類・カモ類・ハクチョウ類・ガン・カモ類・ツグミ類・ウミスズメ類・キジバト・カイツブリ類・ヤマゲラ類などがみられた。魚ではタイ・ボラ・イワシ・コイ・フナ・ウグイ・アイナメ・カサゴ・スズキ・カレイ・ヒラメ・マグロ・コチがみられた。動物骨で特記すべきことは貝層最下部もしくは貝層直下から検出されたイノシシ頭蓋骨12体分、シカ頭蓋骨3体分、鹿角1本である。イノシシ頭蓋骨の一部には意図的な配置がみられ、イノシシ頭蓋骨・鹿角の一部には強く被熱した部分がみられた。これらの動物骨は他の貝層中から検出された動物骨とは違って儀礼的行為に使用されたものと考えられる(Ⅲ章参照)。ツノガイ製貝製品は筒状に切断された管玉状のものと薄く切断された小玉状のものが製品・未製品・破損品合わせて2128点出土した(ツノガイ製貝製品に関してはⅡにて詳細を報告する)。これらの出土遺物のほか骨角器では針・刺突具を中心に貝層中から

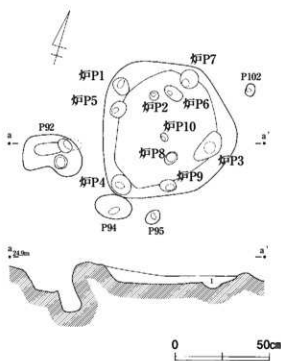


第8図 SI-002 (2)

表2 SI-002ビット計測表

単位: cm

番号	長径	短径	深さA	深さB	平面形態	備考	番号	長径	短径	深さA	深さB	平面形態	備考
P1	8	7	7	-	円		P94	20	12	14	-	楕円	
P2	14	13	8	-	円		P95	16	8	17	-	楕円	
P3	9	8	7	-	円		P96	9	5	5	-	楕円	
P4	8	6	14	-	楕円		P97	9	8	10	-	円	
P5	15	9	6	-	楕円		P98	11	8	7	-	楕円	
P6	7	3	10	-	楕円		P99	9	7	-	-	楕円	
P7	14	12	12	-	円		P100	6	5	-	-	円	
P8	8	6	11	-	楕円		P101	11	7	11	-	楕円	
P9	16	9	11	-	楕円		P102	9	6	7	-	楕円	
P10	10	9	16	-	円		P103	8	7	3	-	円	
P11	26	21	37	-	楕円		P104	11	8	5	-	楕円	
P12	19	15	35	-	楕円		P105	9	7	6	-	楕円	
P13	28	23	52	-	楕円		P106	6	4	9	-	楕円	
P14	14	12	10	-	円		P107	6	4	9	-	楕円	
P15	16	16	11	-	円		P108	10	9	23	-	円	
P16	21	16	8	-	楕円		P109	9	6	16	-	楕円	
P17	22	17	28	-	楕円		P110	11	9	7	-	楕円	
P18	9	8	14	-	円		P111	10	7	5	-	楕円	
P19	12	10	13	-	円		P112	24	15	12	-	不整形	
P20	18	15	33	-	楕円		P113	8	7	5	-	円	
P21	9	8	15	-	円		P114	9	8	12	-	円	
P22	9	7	7	-	楕円		P115	8	6	6	-	不整形	
P23	10	7	10	-	楕円		P116	15	7	6	-	楕円	
P24	21	16	39	-	不整形		P117	12	7	11	-	楕円	
P25	19	18	9	-	円		P118	11	9	11	-	楕円	
P26	17	16	31	-	円		P119	16	14	15	-	円	
P27	11	10	14	-	円		P120	16	8	8	-	楕円	
P28	15	13	27	-	円		P121	8	11	14	-	楕円	
P29	7	6	20	-	円		P122	18	15	35	-	楕円	
P30	19	15	23	-	楕円		P123	7	5	6	-	楕円	
P31	13	12	9	-	円		P124	8	7	12	-	円	
P32	8	7	10	-	円		P125	8	7	22	-	円	
P33	20	9	7	-	楕円		P126	12	9	44	-	楕円	
P34	11	6	55	-	楕円		P127	7	6	16	-	円	
P35	13	19	13	-	楕円		P128	8	6	9	-	楕円	
P36	10	7	12	-	楕円		P129	16	13	14	-	楕円	
P37	22	14	38	-	楕円		P130	17	12	62	-	楕円	
P38	15	15	19	-	円		P131	16	9	9	-	楕円	
P39	21	18	34	-	円		P132	33	18	11	23	不整形	
P40	9	5	11	-	楕円		P133	15	12	12	-	楕円	
P41	9	7	8	-	楕円		P134	20	8	48	-	楕円	
P42	8	5	5	-	楕円		P135	9	7	6	-	楕円	
P43	11	9	10	-	円		P136	17	8	12	-	楕円	
P44	29	17	48	-	楕円		P137	14	12	28	-	円	
P45	17	15	24	-	円		P138	13	8	10	-	楕円	
P46	13	8	16	-	楕円		P139	14	12	27	-	円	
P47	9	7	17	-	楕円		P140	23	17	31	-	楕円	
P48	17	15	27	-	不整形		P101	15	12	30	-	楕円	
P49	18	15	8	-	楕円		P102	7	5	10	-	楕円	
P50	9	8	10	-	円		P103	17	11	26	-	楕円	
P51	14	11	15	-	楕円		P104	18	-	43	-	円	円05と重複
P52	20	10	12	-	不整形		P105	18	-	44	-	円	円04と重複
P53	9	7	12	-	楕円		P106	8	6	7	-	円	



1 敷地内土 2 土壁 3 壁面土 4 土層 5 土層 6 土層 7 土層 8 土層 9 土層 10 土層

第9図 SI-002 炉跡

表3 SI-002炉跡ピット計測表

単位: cm

番号	長径	短径	深さ	平面形態	備考
P1	10	9	19	楕円	壁面
P2	6	5	3	楕円	底面
P3	20	11	4	楕円	壁面
P4	12	10	22	楕円	壁面
P5	10	8	10	楕円	壁面
P6	12	7	11	楕円	底面
P7	11	10	17	円	壁面
P8	8	6	8	楕円	底面
P9	10	7	17	楕円	壁面
P10	6	4	3	楕円	底面

出土した(骨角器に関してはⅡにて詳細を報告する)。石器では磨り石・敲石・石皿などが出土した(石器に関してはⅡにて詳細を報告する)。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半晩糸文末期と考えられる。

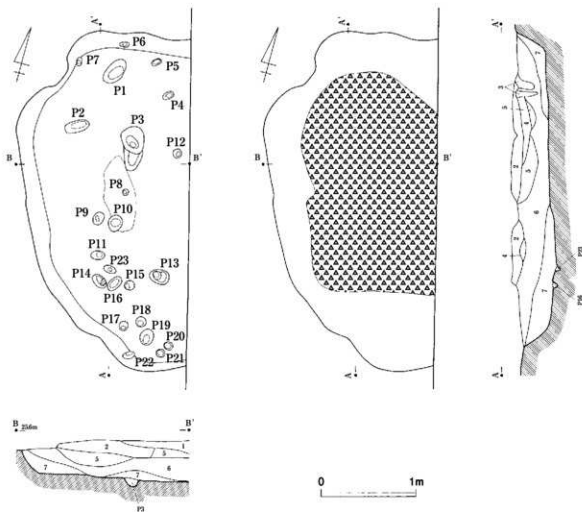
SI-003 (第10図、図版3)

調査区はやや南側、6M36・46グリッドに位置する。東側約1/3は調査区外である。確認面は表土下約15～20cmであり、南壁付近に攪乱がみられた。覆土の堆積状態は、まず中央部に向かって黒褐色土及び暗褐色土が堆積し、中央部やや北寄りの窪みには厚さ約28cmのヤマトシジミを主体とした混貝土層が堆積していた。

平面プランは南北約3.4m、東西約1.8m(検出範囲内)の楕円形を呈すると考えられる。壁はⅡ層中から垂直に掘り込まれ、壁高は検出面で21～30cmを測る。壁溝は検出されなかった。床面は直床であり、一部硬化していた。ピットは調査範囲内で23基(径5～46cm、深さ6～37cm:表4)検出された。

炉跡は検出範囲内では確認できなかった。

遺物は貝層中を含め、覆土中から縄文時代早期土器片・動物骨・ツノガイ製貝製品・骨角器などが出土したが遺物量はさほど多くなかった。縄文時代早期前半の土器は無文土器群が主体的に出土し、三浦半島に分布の中心地域がある大浦山式土器も少量であるが出土した(土器に関してはⅡにて詳細を報告する)。動物骨のうち獣ではイノシシ・シカ・タヌキ・ウサギ・キツネ・ムササビなどがみられた。鳥ではキジ類・カモ類・ハクチョウ類・ツグミ類などがみられた。ツノガイ製貝製品はSI-002同様、筒状に切断された管玉状のものと薄く切断された小玉状のものが製品・未製品・破損品合わせて48点出土し



- 1 常磐赤土 2. 3000 3. 5000 4. 5000 5. 5000
 6 常磐赤土 7. 3000 8. 5000 9. 5000 10. 5000
 11 常磐赤土 12. 3000 13. 5000 14. 5000 15. 5000
 16 常磐赤土 17. 3000 18. 5000 19. 5000 20. 5000
 21 常磐赤土 22. 3000 23. 5000 24. 5000 25. 5000

第10図 SI-003

表4 SI-003ピット計測表

単位：cm

番号	長径	短径	深さA	深さB	平面形態	備考	番号	長径	短径	深さA	深さB	平面形態	備考
P1	30	17	10	-	楕円		P13	21	16	23	-	楕円	
P2	37	13	9	-	楕円		P14	18	11	11	-	楕円	
P3	46	24	37	-	不規則		P15	11	11	14	-	円	
P4	12	8	8	-	楕円		P16	19	11	6	-	楕円	
P5	10	6	5	-	楕円		P17	11	9	13	-	楕円	
P6	10	6	16	-	楕円		P18	11	10	10	-	円	
P7	9	5	37	-	楕円		P19	17	15	19	-	円	
P8	7	6	7	-	円		P20	10	8	15	-	円	
P9	15	11	23	-	楕円		P21	10	9	8	-	円	
P10	18	15	10	-	楕円		P22	13	7	9	-	楕円	
P11	14	10	11	-	楕円		P23	13	8	9	-	楕円	
P12	10	9	8	-	円								

た(ツノガイ製貝製品に関してはⅡにて詳細を報告する)。これらの出土遺物のほか骨角器では針・刺突具を中心に貝層中から出土した(骨角器に関してはⅡにて詳細を報告する)。石器では磨り石・敲石などが出土した(石器に関してはⅡにて詳細を報告する)。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半捻糸文末期と考えられる。

SI-004 (第11・12図、図版4・5)

調査区はやや南側、6M35・36・45・46・56グリッドに位置する。西側の一部は立ち上がり不明瞭であり、更に西側調査区域外に延びるのかは不明である。確認面は表土下約15～20cmであり、東側を中心に耕作などによる攪乱がみられた。覆土の堆積状態はまず、壁際から中央部に向かい暗褐色土(第11層)、黒褐色土(第10層)が堆積し、その後中央部の窪地にヤマトシジミを主体とする混土貝層・混貝土層・灰層が堆積していた。このヤマトシジミを主体とする貝層は最大で約32cmの厚さを測る。また、西側部分に平面プラン及び覆土の堆積に不自然な部分があるが別遺構の重複は不明である。

平面プランは南北約5.7m、東西約3.3mの楕円形を呈すると考えられる。壁はⅡ層中から垂直に掘り込まれ、壁高は検出面で2～20cmを測る。壁溝は検出されなかった。床面は直床であり、中央部を中心に楕円形に一段低く(約3～12cm)になっており、硬化していた。ピットは調査範囲内で108基(径5～51cm、深さ3～32cm:表5)検出された。

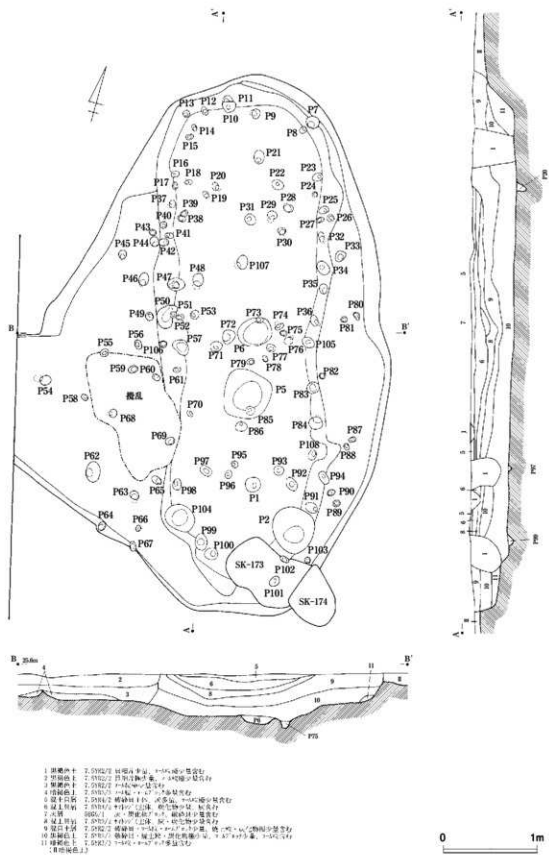
灰跡は確定できなかったが床面中央部付近に位置するP6の覆土中に炭化物がみられ、周辺から小ピット10基が検出されたことから灰跡(灰床跡)の可能性が考えられる。

遺物は貝層中を含め、覆土中から縄文時代早期土器片・動物骨・ツノガイ製貝製品・骨角器などが出土したがSI-002に比べて出土点数は少なかった。縄文時代早期前半の土器は無文土器群が主体的に出土し、三浦半島に分布の中心地域がある大浦山式土器も少量であるが出土した(土器に関してはⅡにて詳細を報告する)。動物骨のうち獣ではイノシシ・シカ・タヌキ・ウサギなどがみられた。鳥ではキジ類・カモ類・ハクチョウ類・ガン・カモ類・ツグミ類・キジバトなどがみられた。魚ではタイ・ボラ・イワシ・コイ・フナ・ウグイ・スズキ・カレイ・ウナギ・タラがみられた。ツノガイ製貝製品はSI-002同様、筒状に切断された管玉状のものと薄く切断された小玉状のものが製品・未製品・破損品合わせて95点出土した(ツノガイ製貝製品に関してはⅡにて詳細を報告する)。これらの出土遺物のほか骨角器では針・刺突具を中心に貝層中から出土した(骨角器に関してはⅡにて詳細を報告する)。石器では磨り石・敲石などが出土した(石器に関してはⅡにて詳細を報告する)。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半捻糸文末期と考えられる。

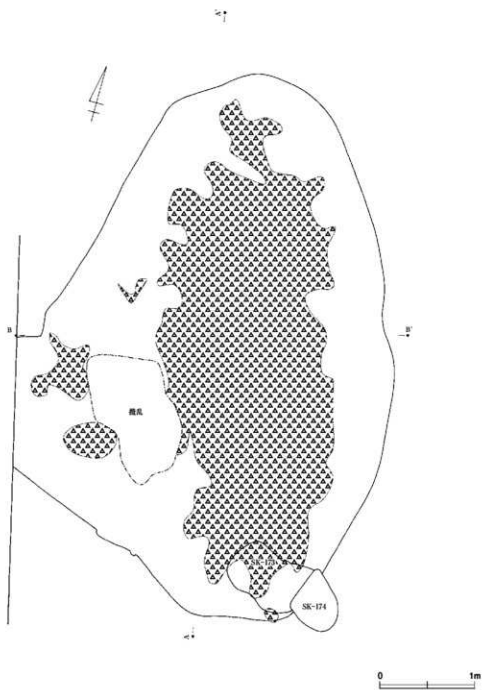
SI-006 (第13図、図版5)

調査区の北西端、6M64・65・74・75グリッドに位置する。北・南・西の三方が調査区域外であり、中央部の一部及び南側は攪乱により壊されている。また、西側は南北方向にSD-007が走っている(溝状遺構:新)。

平面プランは検出部分が一部であり、西側部分の覆土の状態が不明瞭であるため不明である。規模は検出範囲内で南北2.3m、東西6.4m(西側全てを住居跡内と考えた場合)である。壁はⅡ層中から垂直に掘り込まれ、壁高は検出面で3～6cmを測る。壁溝は検出されなかった。床面は直床であり、検出範



第11圖 SI-004 (1)



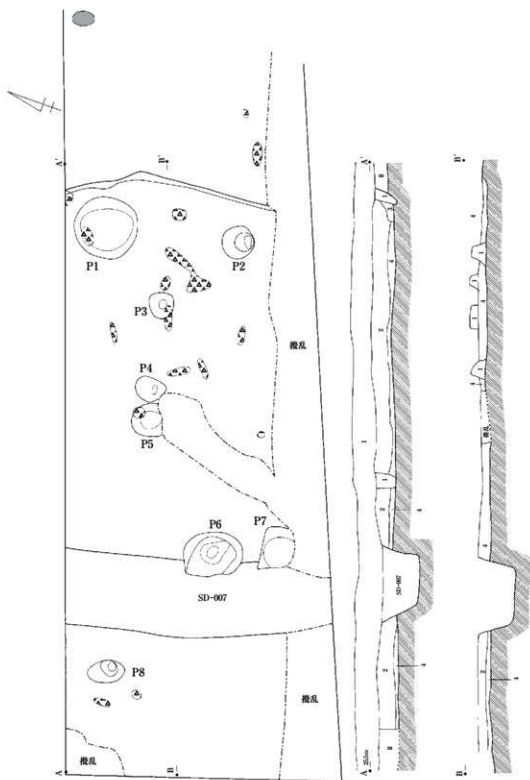
第12図 SI-004 (2)

表5 SI-004ビット計測表

単位: cm

番号	長径	短径	深さA	深さB	平面形態	備考	番号	長径	短径	深さA	深さB	平面形態	備考
P1	17	16	20	-	円		P96	10	7	7	-	楕円	
P2	50	45	22	-	円		P97	19	14	19	-	不整形円	
P5	51	50	27	-	踏込方	P85と重複	P98	8	6	7	-	楕円	
P6	28	30	6	-	楕円	P73と重複	P99	11	7	11	-	楕円	
P7	15	13	26	-	円		P60	9	6	8	-	楕円	
P8	9	7	12	-	楕円		P61	8	5	9	-	楕円	
P9	10	10	18	-	円		P62	22	15	28	-	楕円	
P10	15	12	14	-	不整形円	P11と重複	P63	11	9	13	-	楕円	
P11	-	13	11	-	不整形円	P10と重複	P64	10	8	21	-	楕円	
P12	10	7	17	-	楕円		P65	11	7	10	-	楕円	
P13	8	7	8	-	円		P66	7	6	3	-	円	
P14	8	5	6	-	楕円		P67	11	6	13	-	楕円	
P15	8	5	10	-	楕円		P68	10	8	21	-	楕円	
P16	9	7	14	-	楕円		P69	10	8	17	-	楕円	
P17	8	6	11	-	楕円		P70	8	5	6	-	楕円	
P18	8	11	11	-	楕円		P71	14	11	32	-	楕円	
P19	8	6	11	-	楕円		P72	17	14	15	-	楕円	
P20	9	7	12	-	楕円		P73	9	6	11	-	楕円	P16と重複
P21	15	11	18	-	楕円		P74	10	6	11	-	楕円	
P22	13	10	17	-	楕円		P75	8	6	13	-	楕円	
P23	11	8	17	-	楕円		P76	10	7	4	-	楕円	
P24	6	5	11	-	円		P77	10	9	16	-	円	
P25	11	8	16	-	楕円		P78	8	6	8	-	楕円	
P26	8	8	5	-	円		P79	9	7	13	-	楕円	
P27	9	5	5	-	楕円		P80	10	5	22	-	不整形円	
P28	11	8	16	-	楕円		P81	7	6	5	-	円	
P29	11	9	27	-	楕円		P82	6	6	5	-	円	
P30	9	7	17	-	楕円		P83	13	12	7	-	円	
P31	13	11	13	-	楕円		P84	15	14	17	-	円	
P32	11	5	22	-	楕円		P85	10	10	19	-	円	P15と重複
P33	13	10	7	-	楕円		P86	13	11	25	-	円	
P34	16	12	12	-	楕円		P87	9	6	6	-	楕円	
P35	11	8	14	-	楕円		P88	8	6	5	-	楕円	
P36	13	8	16	-	楕円		P89	8	7	6	-	円	
P37	8	8	17	-	円		P90	9	6	6	-	楕円	
P38	8	6	11	-	楕円	P39と重複	P91	14	10	16	-	楕円	
P39	-	6	5	-	楕円	P38と重複	P92	16	10	7	-	楕円	
P40	8	7	17	-	円		P93	12	10	8	-	円	
P41	7	7	18	-	円		P94	15	9	6	-	楕円	
P42	11	8	15	-	楕円		P95	8	7	11	-	円	
P43	8	6	7	-	楕円		P96	9	7	7	-	楕円	
P44	10	10	10	-	円		P97	14	10	13	-	楕円	
P45	10	9	8	-	円		P98	12	9	10	-	楕円	
P46	14	10	14	-	楕円		P99	18	13	15	-	楕円	
P47	18	14	24	-	楕円		P100	14	13	8	-	円	
P48	14	12	15	-	円		P101	13	10	11	-	楕円	
P49	9	8	4	-	円		P102	8	5	11	-	楕円	
P50	29	18	11	-	不整形円	P51と重複	P103	7	7	7	-	円	
P51	7	7	9	-	円	P50・52と重複	P104	32	27	30	-	楕円	
P52	9	6	8	-	楕円	P51と重複	P105	14	11	17	-	楕円	
P53	11	9	6	-	楕円		P106	8	7	14	-	円	
P54	12	10	30	-	円		P107	15	12	16	-	円	
P55	9	8	4	-	円		P108	12	10	14	-	円	

※P3・414欠番



- 1 灰土層 T. 51022 灰土層
 2 灰土層 T. 51023 灰土層 + 27° 斜土層
 3 灰土層 T. 51024 灰土層 + 27° 斜土層
 4 灰土層 T. 51025 灰土層
 (1) 掘瓦平, 掘瓦(向)

0 1m

第13圖 SI-006

表6 SI-006ピット計測表

単位: cm

番号	長径	短径	深さA	深さB	平面形態	備考	番号	長径	短径	深さA	深さB	平面形態	備考
P1	67	67	17	-	円		P5	-	34	19	-	楕円	一部破片
P2	35	34	26	-	円		P6	62	-	29	-	楕円	SD-007と重複
P3	27	26	20	-	円		P7	-	-	24	-	楕円方	SD-007と重複
P4	33	26	19	-	不整形	一部破片	P8	39	25	33	-	楕円	

囲内で特に硬化した部分は見られなかった。本住居跡に伴うピットは8基(径19～67cm、深さ17～33cm:表6)検出された。

炉跡は検出範囲内では確認できなかった。中央部の攪乱付近に存在した可能性も考えられる。本住居跡が位置する調査区南側は耕作及び攪乱がⅡ層下面まで達している部分が多く、包含層及び遺構確認面の状態が良くなかった。そのためヤマトシジミ主体の貝ブロックが一部存在していたが、径6～58cm程の小ブロックが16箇所検出されただけであった。

遺物は貝層中を含め、覆土中から縄文時代早期土器片・動物骨・ツノガイ製貝製品・骨角器などが出土したがSI-002に比べ出土点数は少なかった。縄文時代早期前半の土器は無文土器群が主体的に出土し、三浦半島に分布の中心地域がある大浦山式土器も少量であるが出土した(土器に関してはⅡにて詳細を報告する)。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半拵糸文末期と考えられる。

SI-008A (第14図、図版6)

調査区の北側、5M42・43・52・53グリッドに位置する。SI-009(竪穴住居跡:旧)、SK-008B・C(土坑:新)と重複する。南西側約1/2は調査区域外である。

平面プランは現状で南北3.4m、東西2.7mを測り楕円形を呈すると考えられる。壁は垂直に掘り込まれ、壁高は10～17cmを測る。北東側にピット1基(長径不明、短径22cm、深さ14cm)を伴う。

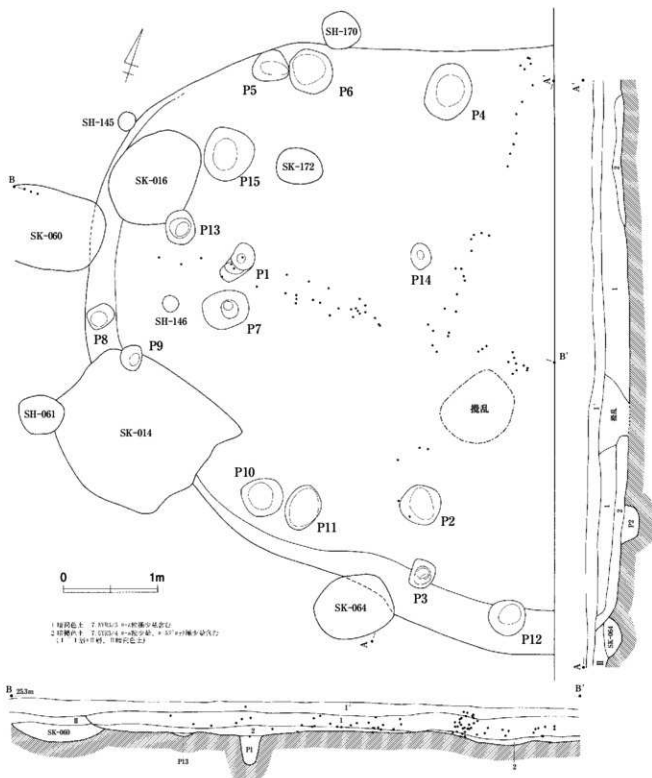
炉跡は検出範囲内では確認できなかった。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片などが出土したが大部分はSK-008Bに伴うものであり、本住居跡に伴う遺物は少なかった。縄文時代早期前半の土器は無文土器群が主体的に出土した(土器に関してはⅡにて詳細を報告する)。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半拵糸文末期と考えられる。

SI-009 (第14図、図版7)

調査区の北西側、5M53・63グリッドに位置する。南西側は調査区域外であり、西側はSI-008A(竪穴住居跡:新)と重複する。

平面プランは検出部分が一部であるため不明である。規模は検出範囲内で南北2.7m、東西1.0mである。



第15図 SI-010

表7 SI-010ピット計測表

単位: cm

番号	長径	短径	深さ	平面形態	備考	番号	長径	短径	深さ	平面形態	備考
P1	45	25	33	楕円	テラス有り	P9	27	22	28	楕円	
P2	44	43	21	円		P10	46	42	19	円	
P3	31	25	45	楕円		P11	50	37	8	楕円	
P4	61	46	23	楕円		P12	40	39	20	円	
P5	38	33	12	不整形		P13	36	31	39	楕円	
P6	49	47	12	円		P14	28	22	37	楕円	
P7	49	39	66	楕円		P15	57	53	13	円	
P8	29	23	65	楕円							

壁はⅡ層中から垂直に掘り込まれ、壁高は検出面で2～12cmを測る。壁溝は検出されなかった。床面は直床であり、検出範囲内で特に硬化した部分は見られなかった。北側からピットは1基（径28cm、深さ13cm）が検出された。

灰跡は検出範囲内では確認できなかった。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片などが出土したが出土点数は少なかった。縄文時代早期前半の土器は無文土器群が主体的に出土した（土器に関してはⅡにて詳細を報告する）。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半終糸文末期と考えられる。

SI-010（第15図、図版8）

調査区の北東側、5M23・32～34・43・44グリッドに位置する。東側は調査区域外であり、西側はSK-014・016・060（古）・172（新）（土坑・焼土跡）、SH-146（ピット：新）、北側はSH-170（ピット）、南側はSK-064（土坑：古）と重複する。

平面プランは東西に長い楕円形を呈すると考えられる。規模は検出範囲内で南北6.5m、東西5.0mである。壁はⅡ層中から垂直に掘り込まれ、壁高は検出面で1～13cmを測る。壁溝は検出されなかった。床面は直床であり、検出範囲内で特に硬化した部分は見られなかった。本住居跡に伴うピットは15基（径22～61cm、深さ8～66cm：表7）検出された。

灰跡は検出範囲内では確認できなかった。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片などが出土したが出土点数は少なかった。縄文時代早期前半の土器は無文土器群が主体的に出土した（土器に関してはⅡにて詳細を報告する）。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半終糸文末期と考えられる。

SI-011（第16図、図版8）

調査区の北東端、5M22・23グリッドに位置する。北及び東側は調査区域外であり、西側はSH-171（ピット）と重複する。

平面プランは大部分が調査区域外のため不明であるが円形もしくは楕円形を呈すると考えられる。規模は検出範囲内で南北2.9m、東西3.5mである。壁はⅡ層中から垂直に掘り込まれ、壁高は検出面で1～10cmを測る。壁溝は検出されなかった。床面は直床であり、検出範囲内で特に硬化した部分は見られなかった。本住居跡に伴うピットは6基（径19～82cm、深さ9～47cm：表8）検出された。

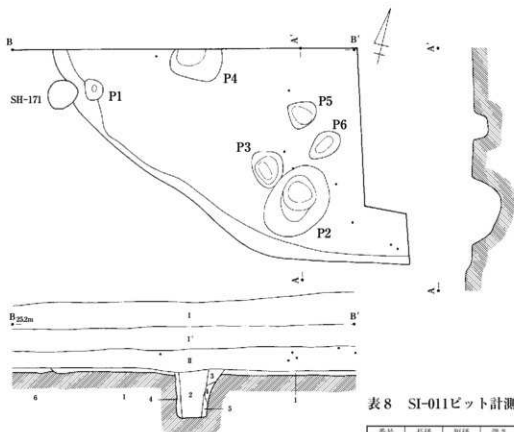
灰跡は検出範囲内では確認できなかった。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片などが出土したが出土点数は少なかった。縄文時代早期前半の土器は無文土器群が主体的に出土した（土器に関してはⅡにて詳細を報告する）。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半終糸文末期と考えられる。

SI-012（第17図、図版9）

調査区の北東側、5M63・73グリッドに位置する。西側約1/2は調査区域外である。

平面プランは隅丸方形を呈すると考えられる。規模は検出範囲内で南北2.1m、東西1.2mである。壁はⅡ層中から垂直に掘り込まれ、壁高は検出面で4～10cmを測る。壁溝は検出されなかった。床面は



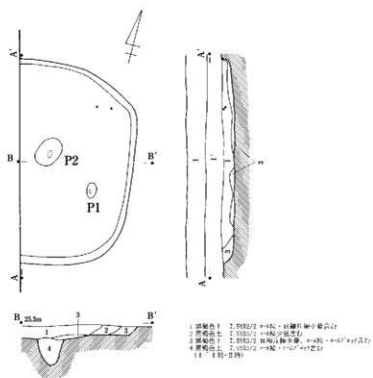
- ① 盛地色土 2. 5002/2 $\alpha=45^\circ$ $\beta=10^\circ$ $\gamma=10^\circ$ 少量灰土
 ② 盛地色土 2. 5002/2 $\alpha=45^\circ$ $\beta=10^\circ$ $\gamma=10^\circ$ 灰土少量混在
 ③ 盛地色土 2. 5002/2 $\alpha=45^\circ$ $\beta=10^\circ$ $\gamma=10^\circ$
 ④ 盛地色土 2. 5002/2 $\alpha=47^\circ$ $\beta=10^\circ$ $\gamma=10^\circ$
 ⑤ 盛地色土 2. 5002/2 $\alpha=45^\circ$ $\beta=10^\circ$ $\gamma=10^\circ$
 ⑥ 盛地色土 2. 5002/2 $\alpha=45^\circ$ $\beta=10^\circ$ $\gamma=10^\circ$ 少量灰土
 (1) 1層-2層、直階層外壁

表8 SI-011ピット計測表

単位: cm

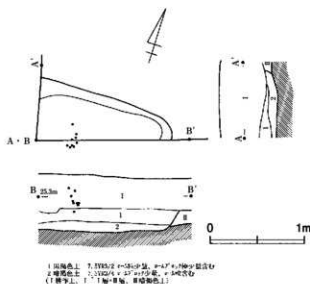
番号	長径	短径	深さ	平面形状	備考
P1	24	19	28	楕円	
P2	82	60	31	楕円	
P3	60	32	43	楕円	
P4	53	-	47	不整形	
P5	32	30	15	不整形	
P6	30	25	9	楕円	

第16図 SI-011



- ① 盛地色土 2. 5002/2 $\alpha=45^\circ$ $\beta=10^\circ$ $\gamma=10^\circ$ 少量灰土
 ② 盛地色土 2. 5002/2 $\alpha=45^\circ$ $\beta=10^\circ$ $\gamma=10^\circ$
 ③ 盛地色土 2. 5002/2 黒褐色土層 $\alpha=45^\circ$ $\beta=10^\circ$ $\gamma=10^\circ$
 ④ 盛地色土 2. 5002/2 $\alpha=45^\circ$ $\beta=10^\circ$ $\gamma=10^\circ$
 (1) 1層-2層

第17図 SI-012



第18図 SI-015

直床であり、検出範囲内で特に硬化した部分は見られなかった。本住居跡に伴うピットは2基（P1：17×11cm、深さ25cm、P2：32×24cm、深さ29cm）が検出された。

竈跡は検出範囲内では確認できなかった。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片などが出土したが出土点数は少なかった。縄文時代早期前半の土器は無文土器群が主体的に出土した（土器に関してはⅡにて詳細を報告する）。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半拵糸文末期と考えられる。

SI-015（第18図、図版9）

調査区の北東側、5M51・52グリッドに位置する。北壁の一部分を検出しただけである。

平面プランは大部分が調査区域外のため不明であるが隅丸方形を呈すると考えられる。規模は検出範囲内で南北0.7m、東西1.5mである。壁はⅡ層中から垂直に掘り込まれ、壁高は検出面で4～7cmを測る。壁溝は検出されなかった。床面は直床であり、検出範囲内で特に硬化した部分は見られなかった。本住居跡に伴うピットは検出されなかった。

竈跡は検出範囲内では確認できなかった。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片などが出土したが出土点数は少なかった。縄文時代早期前半の土器は無文土器群が主体的に出土した（土器に関してはⅡにて詳細を報告する）。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半拵糸文末期と考えられる。

ii. 平安時代

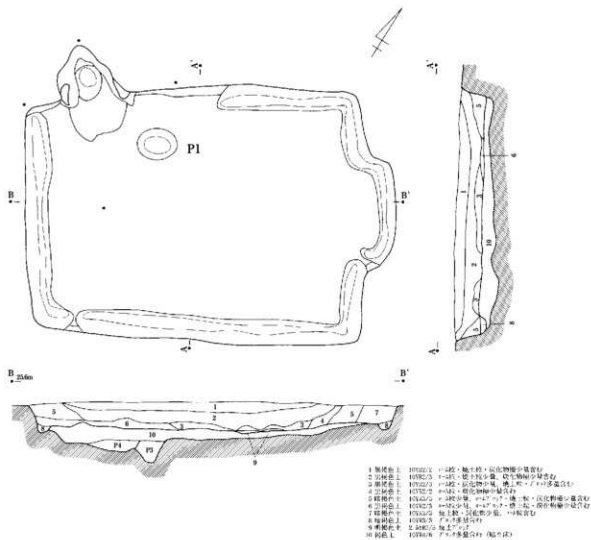
SI-001（第19・20図、図版10）

調査区の中央付近、6M04・05・14・15グリッドに位置する。

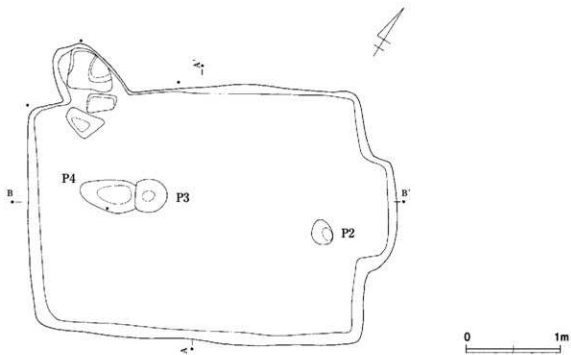
平面プランは南北2.8m、東西3.9mの長方形を呈する。主軸方向はN-44°-Wである。壁は垂直に掘り込まれ、壁高は2～16cmを測る。壁溝（幅14～22cm、深さ2～6cm）はカマド部分を含めた北壁の約半分と南壁と東壁の一部で途切れる。また、東壁中央付近にテラス状の突出部分（幅120cm×長さ30cm）が存在する。

カマドは北壁の北西コーナー寄りに位置し、壁を55cm掘り込んでいる。すでに天井部は崩落しているが残存状態は比較的良好である。袖部は浅黄色の砂と粘土によって構築されていた。燃焼部は深さ5cmを測り、煙道部は約55°の角度で立ち上がっている。

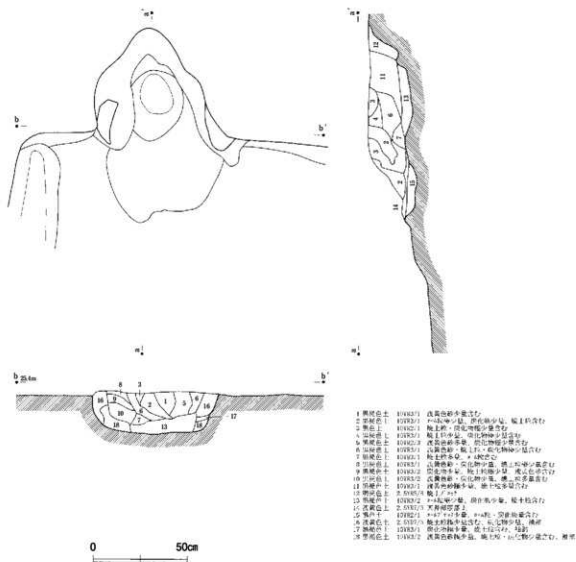
遺物は覆土中から土師器杯・甕、鉄製品などが出土した。これらの出土遺物から9世紀後半と考えられる。



- 1 無様布土 F1922/L 1-2段、粘土質、石灰物極少量含む
- 2 赤褐色土 F1922/3 1-2段、粘土質少量、石灰物極少量含む
- 3 赤褐色土 F1922/3 1-2段、石灰物少量、粘土質、石灰物少量含む
- 4 赤褐色土 F1922/2 1-2段、粘土質少量含む
- 5 暗褐色土 F1922/2 1-2段少量、1-2段、粘土質、石灰物極少量含む
- 6 赤褐色土 F1922/5 1-2段少量、1-2段、粘土質、石灰物極少量含む
- 7 暗褐色土 F1922/2 粘土質、石灰物少量、石灰質含む
- 8 暗褐色土 F1922/5 石灰質少量含む
- 9 暗褐色土 F1922/2 粘土質
- 10 赤褐色土 F1922/6 石灰質少量含む (粘土質)



第19図 SI-001



第20図 SI-001カマド

3. 土坑

SK-005 (第21図、図版11)

調査区の南東端、6M67グリッドに位置する。東側は調査区域外である。また、SK-114 (土坑：古)、倒木痕と重複しており平面プランならびに規模は非常に不明瞭である。覆土中にはヤマトシジミを主体とする貝層を伴っていた。

遺物は貝層中を含め、覆土中から縄文時代早期土器片・動物骨・ツノガイ製貝製品などが出土したが遺物量はさほど多くなかった。縄文時代早期前半の土器は無文土器群が主体的に出土し、三浦半島に分布の中心地域がある大浦山式土器も少量であるが出土した (土器に関してはⅡにて詳細を報告する)。動物骨のうち獣ではイノシシ・タヌキ・シカなどがみられた。鳥ではキジ類などがみられた。ツノガイ製貝製品はSI-002同様、筒状に切断された管玉状のものと薄く切断された小玉状のものが製品・未製品・破損品合わせて8点出土した (ツノガイ製貝製品に関してはⅡにて詳細を報告する)。所属時期は出土

土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SK-008B (第14図、図版6・7)

調査区の北側、5M42・43・52・53グリッドに位置する。南西側約1/3は調査区域外である。SI-008A (堅穴住居跡:古)、SK-008C (土坑:古)と重複する。また、本土坑は覆土の状態から造り替えが考えられる。

平面プランは検出範囲内で長径220cm以上、短径140cmの不正方形を呈すると考えられる。

遺物は覆土中から大量の縄文時代早期土器片などが出土した。出土土器片の中には大浦山式土器の大型破片も含まれていた(土器に関してはⅡにて詳細を報告する)。

SK-008C (第14図、図版6)

調査区の北側、5M52グリッドに位置する。西側の一部は調査区域外である。SI-008A (堅穴住居跡:新)、SK-008B (土坑:新)と重複する。

平面プランは径114×46cm、深さ15cmの長楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片などが出土した。(土器に関してはⅡにて詳細を報告する)。

SK-013 (第22図、図版11)

調査区の北側、6M25グリッドに位置する。SI-002 (堅穴住居跡:古)と重複する。

平面プランは径48×34cm、深さ54cmの不正円形を呈する。調査時は単独の埋設土器と考えられていたが動物骨整理中に本土坑を中心に人骨の分布が確認できたため土坑墓と判断した。

遺物は副葬品と考えられるほぼ完形の縄文時代前期土器が出土した(土器に関してはⅡにて詳細を報告する)。所属時期は出土土器などから縄文時代前期と考えられる。

SK-014 (第22図、図版8)

調査区の北側、5M33・43グリッドに位置する。SI-010 (堅穴住居跡)、SH-061 (ピット)と重複する。

平面プランは径160×153cm、深さ28cmの方形を呈する。

遺物は覆土中から比較的多くの縄文時代早期土器片などが出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SK-016 (第23図、図版8・11)

調査区の北側、5M32・33グリッドに位置する。SI-010 (堅穴住居跡)と重複する。

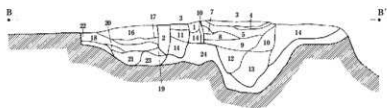
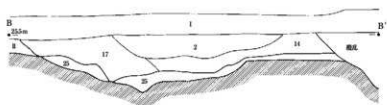
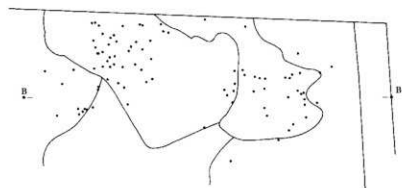
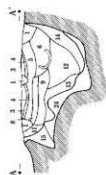
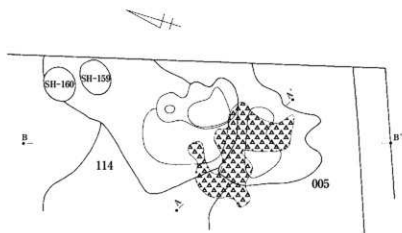
平面プランは径107×87cm、深さ54cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片などが出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SK-018 (第23図、図版13)

調査区の北西側、5M31グリッドに位置する。

平面プランは径69×59cm、深さ20cmの不正形を呈する。



- 1 黑砂土 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂少量含
 - 2 黑砂土 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂少量 4-5 粉砂
 - 3 紅土層 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂 交互的粉砂
 - 4 粉砂 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂
 - 5 紅土層 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂 交互的粉砂
 - 6 紅土層 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂 交互的粉砂
 - 7 紅土層 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂 交互的粉砂
 - 8 紅土層 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂 交互的粉砂
 - 9 紅土層 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂 交互的粉砂
 - 10 紅土層 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂 交互的粉砂
 - 11 紅土層 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂 交互的粉砂
 - 12 紅土層 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂 交互的粉砂
 - 13 紅土層 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂 交互的粉砂
 - 14 黑砂土 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂 交互的粉砂
 - 15 紅土層 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂 交互的粉砂
 - 16 紅土層 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂 交互的粉砂
 - 17 黑砂土 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂 交互的粉砂
 - 18 黑砂土 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂 交互的粉砂
 - 19 黑砂土 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂 交互的粉砂
 - 20 黑砂土 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂 交互的粉砂
 - 21 黑砂土 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂 交互的粉砂
 - 22 黑砂土 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂 交互的粉砂
 - 23 黑砂土 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂 交互的粉砂
 - 24 黑砂土 2. 3Y2/2 紅壤的 2-3 粉砂 交互的粉砂
- 1-15 25-100, 16-23 30-114, 24 200cm
 (1) 紅土層, 2-3 粉砂



第21圖 SK-005 · 114

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半拵糸文末期と考えられる。

SK-025 (第23図、図版13)

調査区の北西側、5M31グリッドに位置する。SK-118 (土坑) と重複する。

平面プランは短径61cm、深さ27cmの楕円形を呈すると考えられる。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半拵糸文末期と考えられる。

SK-026 (第23図、図版11・13)

調査区の北西側、5M21・31グリッドに位置する。

平面プランは径125×109cm、深さ24cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半拵糸文末期と考えられる。

SK-028 (第23図、図版11)

調査区の北西側、5M21グリッドに位置する。

平面プランは径52×45cm、深さ23cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半拵糸文末期と考えられる。

SK-030 (第23図、図版13)

調査区の北西側、5M31・32グリッドに位置する。

平面プランは径65×45cm、深さ26cmの隅丸方形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半拵糸文末期と考えられる。

SK-035 (第23図、図版13)

調査区の北西側、5M41グリッドに位置する。

平面プランは径54×50cm、深さ16cmの円形を呈する。

遺物は出土しなかった。覆土の状態から所属時期は縄文時代と考えられる。

SK-036 (第23図、図版13)

調査区の北西側、5M41・51グリッドに位置する。

平面プランは径60cm、深さ8cmの円形を呈すると考えられる。西側は調査区域外である。

遺物は覆土中から礫が1点出土した。覆土の状態から所属時期は縄文時代と考えられる。

SK-042 (第24図、図版13)

調査区の北西側、5M52グリッドに位置する。

平面プランは径52×26cm、深さ22cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SK-047 (第22図、図版12)

調査区の北側、5M21グリッドに位置する。

平面プランは長径179cm、深さ10cmの楕円形を呈すると考えられる。北側は調査区域外である。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SK-054 (第24図、図版13)

調査区の北側、5M22グリッドに位置する。

平面プランは短径48cm、深さ8cmの楕円形を呈すると考えられる。北側は調査区域外である。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SK-055 (第23図、図版13)

調査区の北側、5M22グリッドに位置する。

平面プランは長径103cm、深さ32cmの楕円形を呈すると考えられる。北側は調査区域外である。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SK-057 (第24図、図版12・13)

調査区の北側、5M22・32グリッドに位置する。

平面プランは径55×41cm、深さ27cmの楕円形を呈する。

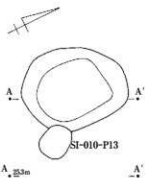
遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SK-060 (第23図)

調査区の北側、5M32グリッドに位置する。SI-010(堅穴住居跡:古)と重複する。

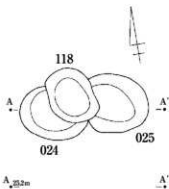
平面プランは径128×86cm、深さ37cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

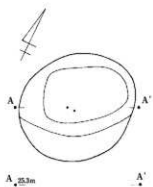


1 黑褐色土 2. 57102.2 ± 0.42 ± 0.15 填土内和少量石灰
2 黑褐色土 2. 57103.2 ± 0.42 ± 0.15 少量石灰
3 棕褐色土 2. 57104.2 ± 0.42 ± 0.15 少量石灰
4 黄褐色土 2. 57104.4 ± 0.42 ± 0.15 少量石灰

SK-016

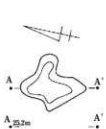


SK-024 · 025 · 118

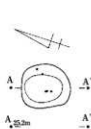


1 黑褐色土 2. 57102.2 ± 0.42 ± 0.15 填土内和少量石灰
2 黑褐色土 2. 57103.2 ± 0.42 ± 0.15 少量石灰
3 棕褐色土 2. 57104.2 ± 0.42 ± 0.15 少量石灰

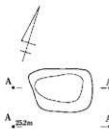
SK-026



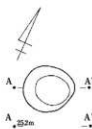
SK-018



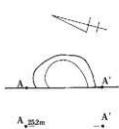
SK-028



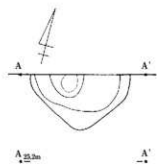
SK-030



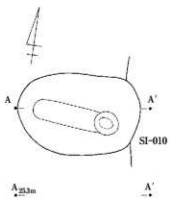
SK-035



SK-036

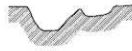
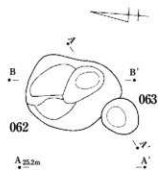


SK-055



1 黑褐色土 2. 57103.2 ± 0.42 ± 0.15 填土内和少量石灰
2 棕褐色土 2. 57104.2 ± 0.42 ± 0.15 少量石灰
(非坑内色)

SK-060



SK-062, SH-063

第23图 土坑 (SK) (2)

SK-062 (第23図、図版13)

調査区の北側、5M43・53グリッドに位置する。SH-063 (ピット) と重複する。

平面プランは径99×74cm、深さ27cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半拵糸文末期と考えられる。

SK-064 (第24図、図版8)

調査区の北側、5M43・44グリッドに位置する。SI-010 (竪穴住居跡) と重複する。

平面プランは径84×66cm、深さ21cmの楕円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SK-080 (第24図、図版13)

調査区の北側、5M54・64グリッドに位置する。

平面プランは径95×86cm、深さ20cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半拵糸文末期と考えられる。

SK-082 (第25図、図版13)

調査区の北側、5M54グリッドに位置する。

平面プランは径59×35cm、深さ19cmの楕円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SK-098 (第24図、図版13)

調査区の中央付近、5M84グリッドに位置する。

平面プランは径52×33cm、深さ64cmの不整形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SK-099 (第24図、図版13)

調査区の中央付近、5M94グリッドに位置する。

平面プランは短径35cm、深さ32cmの楕円形を呈すると考えられる。西側は調査区域外である。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SK-107 (第24図、図版13)

調査区の中央付近、5M95グリッドに位置する。

平面プランは径62×51cm、深さ19cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から礫が1点出土した。覆土の状態から所属時期は縄文時代と考えられる。

SK-114 (第21図、図版11)

調査区の南東側、6M67グリッドに位置する。SK-005 (土坑：新)、SH-159・160 (ピット)、倒木痕と重複する。

平面プランは長径220cm、深さ44cmの楕円形を呈すると考えられる。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半拵糸文末期と考えられる。

SK-115 (第24図)

調査区の北側、5M53・54グリッドに位置する。

平面プランは径61×50cm、深さ19cmの楕円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SK-117 (第24図、図版12)

調査区の北側、5M32・42グリッドに位置する。

平面プランは径68×33cm、深さ31cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半拵糸文末期と考えられる。

SK-118 (第23図、図版13)

調査区の北西側、5M31グリッドに位置する。SK-024・025 (土坑) と重複する。

平面プランは径60×46cm、深さ24cmの楕円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SK-119 (第24図)

調査区の北東側、5M43・44グリッドに位置する。

平面プランは径72×42cm、深さ22cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半拵糸文末期と考えられる。

SK-120 (第24図)

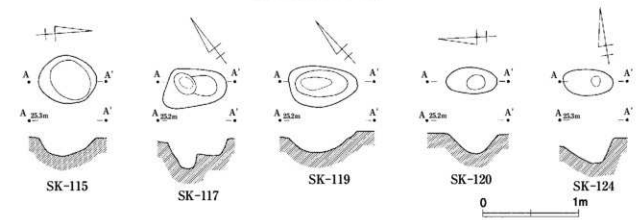
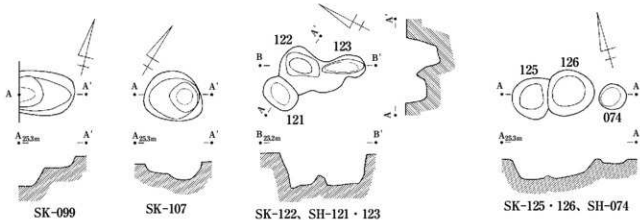
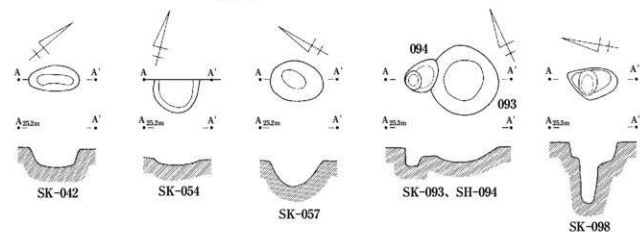
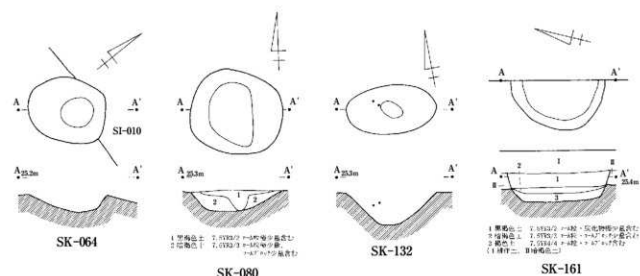
調査区の北東側、5M44グリッドに位置する。

平面プランは径53×28cm、深さ22cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半拵糸文末期と考えられる。

SK-122 (第24図、図版12)

調査区の北側、5M44グリッドに位置する。SH-121・123 (ピット) と重複する。



0 1m

第24図 土坑 (SK) (3)

平面プランは短径51cm、深さ35cmの不整形円形を呈すると考えられる。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片などが出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半捻糸文末期と考えられる。

SK-124 (第24図)

調査区の北側、5M53グリッドに位置する。

平面プランは径52×26cm、深さ26cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片などが出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半捻糸文末期と考えられる。

SK-125 (第24図)

調査区の北側、5M54グリッドに位置する。SK-126 (土坑) と重複する。

平面プランは長径43cm、深さ23cmの不整形円形を呈すると考えられる。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半捻糸文末期と考えられる。

SK-126 (第24図)

調査区の北側、5M54グリッドに位置する。SK-125 (土坑) と重複する。

平面プランは径52×47cm、深さ19cmの円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SK-131 (第25図、図版12・13)

調査区の中央付近、5M95・6M05グリッドに位置する。

平面プランは径204×158cm、深さ49cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から焼礫・縄文時代早期土器片が多量に出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半捻糸文末期と考えられる。

SK-132 (第24図)

調査区の北側、5M53・54グリッドに位置する。

平面プランは径95×61cm、深さ34cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半捻糸文末期と考えられる。

SK-138 (第25図、図版12・13)

調査区の北側、5M32グリッドに位置する。

平面プランは径50×36cm、深さ19cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期

半拵糸文末期と考えられる。

SK-139 (第25図、図版12・13)

調査区の北側、5M32グリッドに位置する。

平面プランは径50×36cm、深さ34cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半拵糸文末期と考えられる。

SK-161 (第24図、図版12)

調査区の南東側、6M57グリッドに位置する。東側は調査区域外である。

平面プランは短径100cm、深さ15cmの円形を呈すると考えられる。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SK-164 (第25図)

調査区の南側、6M36グリッドに位置する。

平面プランは径56×36cm、深さ18cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半拵糸文末期と考えられる。

SK-165 (第25図)

調査区の南側、6M36グリッドに位置する。

平面プランは径55×52cm、深さ40cmの円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半拵糸文末期と考えられる。

SK-172 (第22図、図版12)

調査区の北東側、5M33グリッドに位置する。SI-010 (堅穴住居跡：古) と重複する。

調査当初SI-010の存跡と考えていたが覆土から縄文時代前期黒浜式土器が出土したことから別遺構と判断した。平面プランは径50×38cm、深さ17cmの楕円形を呈する。

所属時期は出土土器から縄文時代前期と考えられる。

SK-173 (第22図、図版4)

調査区はやや南側、6M46・56グリッドに位置する。SI-004 (堅穴住居跡：古)、SK-174 (土坑) と重複する。

調査当初SI-004に付属するピットと考えていたが覆土の重複関係から別遺構と判断した。平面プランは径75×48cm、深さ29cmの不整形を呈する。

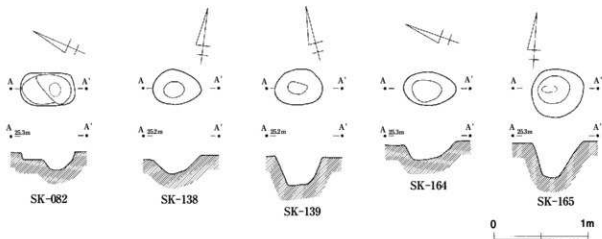
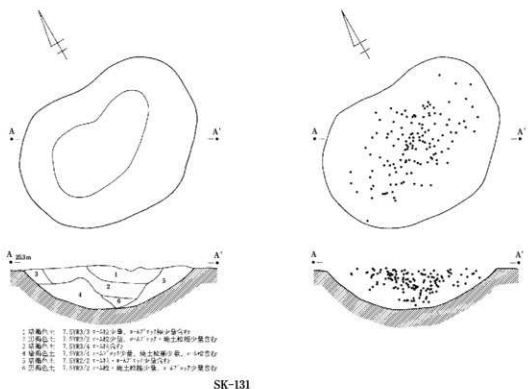
遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SK-174 (第22図、図版4)

調査区のやや南側、6M46・56グリッドに位置する。SI-004 (竪穴住居跡：古)、SK-173 (土坑) と重複する。

調査当初SI-004に付属するピットと考えていたが覆土の重複関係から別遺構と判断した。平面プランは径51×50cm、深さ27cmの隅丸方形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。



第25図 土坑 (SK) (4)

4. ビット

SH-017 (第26図、図版13)

調査区の北西側、5M41グリッドに位置する。

平面プランは径33×30cm、深さ22cmの楕円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-019 (第26図、図版13)

調査区の北西側、5M31グリッドに位置する。

平面プランは径36×31cm、深さ29cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-020 (第26図、図版13)

調査区の北西側、5M31グリッドに位置する。

平面プランは径38×29cm、深さ21cmの楕円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-021 (第26図、図版13)

調査区の北西側、5M30・31グリッドに位置する。

平面プランは径43×32cm、深さ21cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-022 (第26図、図版13)

調査区の北西側、5M30グリッドに位置する。

平面プランは径33×28cm、深さ19cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-023 (第26図、図版13)

調査区の北西端、5M30グリッドに位置する。

平面プランは径29×27cm、深さ23cmの円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-027 (第26図、図版12・13)

調査区の北西側、5M21グリッドに位置する。

平面プランは径37×32cm、深さ24cmの円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半捻糸文末期と考えられる。

SH-029 (第26図、図版13)

調査区の北西側、5M31グリッドに位置する。

平面プランは径77×45cm、深さ31・34cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半捻糸文末期と考えられる。

SH-031 (第26図)

調査区の北側、5M31・32グリッドに位置する。

平面プランは径52×32cm、深さ35cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半捻糸文末期と考えられる。

SH-032 (第26図、図版13)

調査区の北側、5M42グリッドに位置する。

平面プランは径23×21cm、深さ17cmの円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半捻糸文末期と考えられる。

SH-033 (第26図、図版13)

調査区の北側、5M42グリッドに位置する。

平面プランは径48×40cm、深さ23cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半捻糸文末期と考えられる。

SH-034 (第26図、図版13)

調査区の北側、5M52グリッドに位置する。SH-045（ピット）と重複する。

平面プランは短径29cm、深さ21cmの円形を呈すると考えられる。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片などが少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半捻糸文末期と考えられる。

SH-037 (第26図、図版13)

調査区の北側、5M42グリッドに位置する。

平面プランは径25×23cm、深さ31cmの円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-038 (第26図、図版13)

調査区の北西側、5M41グリッドに位置する。

平面プランは径29×27cm、深さ22cmの円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-039 (第26図、図版12・13)

調査区の北側、5M32グリッドに位置する。

平面プランは径38×33cm、深さ15cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-040 (第26図、図版13)

調査区の北側、5M42グリッドに位置する。

平面プランは径33×29cm、深さ26cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代と考えられる。

SH-041 (第26図、図版13)

調査区の北西側、5M41グリッドに位置する。南側は調査区域外である。

平面プランは短径32cm、深さ48cmの楕円形を呈すると考えられる。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-043 (第26図、図版13)

調査区の北側、5M42グリッドに位置する。SH-044 (ピット) と重複する。

平面プランは短径26cm、深さ11cmの楕円形を呈すると考えられる。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-044 (第26図、図版13)

調査区の北側、5M42グリッドに位置する。SH-043 (ピット) と重複する。

平面プランは径37×29cm、深さ14cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-045 (第26図、図版13)

調査区の北側、5M42グリッドに位置する。SH-034 (ピット) と重複する。

平面プランは径46×32cm、深さ11cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-046 (第26図、図版13)

調査区の北側、5M42グリッドに位置する。

平面プランは径30×20cm、深さ8cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-048 (第26図、図版13)

調査区の中央付近、5M84グリッドに位置する。

平面プランは径40×38cm、深さ27cmの円形を呈する。

遺物は覆土中から黒曜石剥片1点が出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代と考えられる。

SH-049 (第26図、図版13)

調査区の北西側、5M30グリッドに位置する。

平面プランは径17×15cm、深さ14cmの円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-050 (第26図、図版13)

調査区の北西側、5M21グリッドに位置する。北側は調査区域外である。

平面プランは短径22cm、深さ9cmの楕円形を呈すると考えられる。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-051 (第26図、図版13)

調査区の北西側、5M31グリッドに位置する。

平面プランは径43×31cm、深さ11cmの円形を呈する。

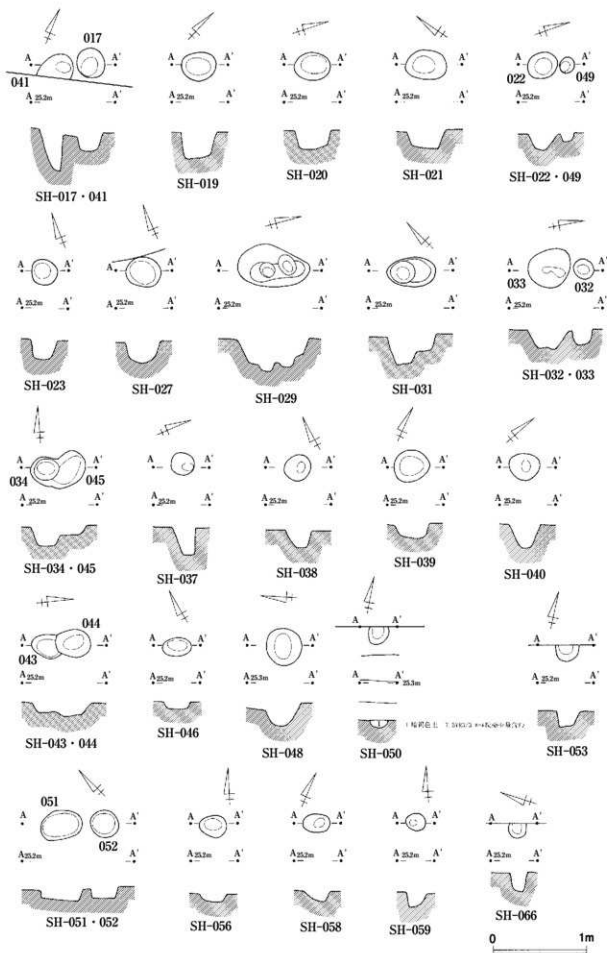
遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-052 (第26図、図版13)

調査区の北西側、5M31グリッドに位置する。

平面プランは径30×29cm、深さ13cmの円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。



第26図 ピット (SH) (1)

SH-053 (第26図、図版13)

調査区の北側、5M22グリッドに位置する。北側は調査区域外である。

平面プランは短径25cm、深さ18cmの楕円形を呈すると考えられる。

遺物は覆土中から礫が1点出土した。覆土の状態から所属時期は縄文時代と考えられる。

SH-056 (第26図、図版12・13)

調査区の北側、5M22グリッドに位置する。

平面プランは径29×24cm、深さ8cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片などが少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-058 (第26図、図版8・12・13)

調査区の北東側、5M22・23グリッドに位置する。

平面プランは径29×22cm、深さ11cmの楕円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-059 (第26図、図版8・12・13)

調査区の北東側、5M23グリッドに位置する。

平面プランは径21×19cm、深さ16cmの円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-061 (第22図、図版8・13)

調査区の北側、5M42・43グリッドに位置する。SK-014(土坑)と重複する。

平面プランは径49×42cm、深さ17cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片などが少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-063 (第23図、図版13)

調査区の北側、5M43グリッドに位置する。SK-062(土坑)と重複する。

平面プランは径40×37cm、深さ11cmの円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-065 (第27図)

調査区の北側、5M44グリッドに位置する。

平面プランは径36×32cm、深さ22cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期と考えられる。

SH-066 (第26図)

調査区の北東側、5M44グリッドに位置する。東側は調査区域外である。

平面プランは短径19cm、深さ25cmの楕円形を呈すると考えられる。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-067 (第27図、図版13)

調査区の北側、5M42グリッドに位置する。

平面プランは径30×25cm、深さ11cmの楕円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-068 (第27図、図版13)

調査区の北側、5M43グリッドに位置する。

平面プランは径36×25cm、深さ37cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代と考えられる。

SH-069 (第27図、図版7)

調査区の北側、5M43グリッドに位置する。

平面プランは径26×22cm、深さ26cmの楕円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-070 (第27図、図版13)

調査区の中央付近、5M84グリッドに位置する。

平面プランは径37×31cm、深さ27cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代と考えられる。

SH-071 (第27図)

調査区の北側、5M43・53グリッドに位置する。

平面プランは径34×32cm、深さ22cmの不整形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-072 (第27図)

調査区の北側、5M43・44グリッドに位置する。

平面プランは径30×22cm、深さ51cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-073 (第27図)

調査区の北側、5M54グリッドに位置する。
平面プランは径32×21cm、深さ18cmの楕円形を呈する。
遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-074 (第24図)

調査区の北側、5M54グリッドに位置する。
平面プランは径29×26cm、深さ10cmの楕円形を呈する。
遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-075 (第27図)

調査区の北側、5M54グリッドに位置する。SH-076（ピット）と重複する。
平面プランは径20×16cm、深さ17cmの楕円形を呈する。
遺物は覆土中から縄文時代早期土器片などが少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-076 (第27図)

調査区の北側、5M54グリッドに位置する。SH-075（ピット）と重複する。
平面プランは径25×22cm、深さ29cmの不整形を呈する。
遺物は覆土中から縄文時代土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代と考えられる。

SH-077 (第27図)

調査区の北側、5M53グリッドに位置する。
平面プランは径26×22cm、深さ21cmの楕円形を呈する。
遺物は覆土中から縄文時代早期土器片などが少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-078 (第27図)

調査区の北側、5M53グリッドに位置する。
平面プランは径25×23cm、深さ13cmの不整形を呈する。
遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-079 (第27図)

調査区の北側、5M53グリッドに位置する。
平面プランは径25×19cm、深さ24cmの楕円形を呈する。
遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前

半撚糸文末期と考えられる。

SH-081 (第27図)

調査区の北側、5M54グリッドに位置する。

平面プランは径27×24cm、深さ21cmの楕円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-083 (第27図、図版13)

調査区の北側、5M64グリッドに位置する。

平面プランは径34×16cm、深さ14cmの楕円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-084 (第27図、図版13)

調査区の北側、5M64グリッドに位置する。

平面プランは径48×36cm、深さ9cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半撚糸文末期と考えられる。

SH-085 (第27図、図版13)

調査区の北側、5M64グリッドに位置する。

平面プランは径33×22cm、深さ14cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半撚糸文末期と考えられる。

SH-086 (第27図、図版13)

調査区の北側、5M64グリッドに位置する。

平面プランは径31×29cm、深さ24cmの円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-087 (第27図、図版13)

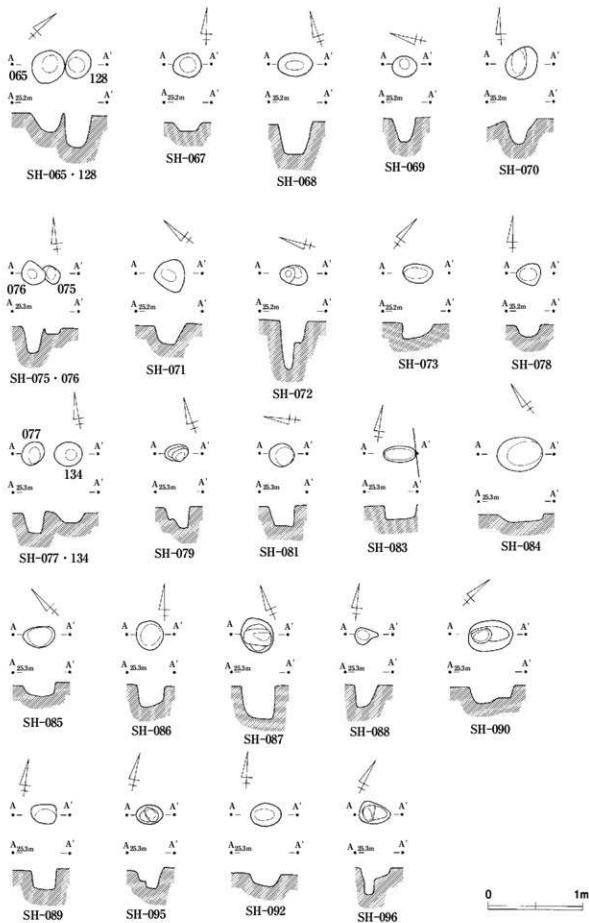
調査区の北側、5M63グリッドに位置する。

平面プランは径38×33cm、深さ37cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半撚糸文末期と考えられる。

SH-088 (第27図、図版13)

調査区の北側、5M63グリッドに位置する。



第27図 ピット (SH) (2)

平面プランは径25×18cm、深さ23cmの不整形円形を呈する。
遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-089 (第27図、図版13)

調査区の北側、5M63グリッドに位置する。
平面プランは径27×21cm、深さ22cmの隅丸方形を呈する。
遺物は覆土中から礫が1点出土した。覆土の状態から所属時期は縄文時代と考えられる。

SH-090 (第27図、図版13)

調査区の北側、5M65・75グリッドに位置する。
平面プランは径47×42cm、深さ19cmの楕円形を呈する。
遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-092 (第27図)

調査区の中央付近、5M85グリッドに位置する。
平面プランは径32×25cm、深さ13cmの楕円形を呈する。
遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-094 (第24図)

調査区の中央付近、5M84・85グリッドに位置する。SK-093(土坑)と重複する。
平面プランは径40×30cm、深さ20cmの楕円形を呈する。
遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-095 (第27図、図版13)

調査区の中央付近、5M84グリッドに位置する。
平面プランは径28×20cm、深さ20cmの楕円形を呈する。
遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半捻糸文末期と考えられる。

SH-096 (第27図、図版13)

調査区の中央付近、5M94グリッドに位置する。
平面プランは径33×22cm、深さ28cmの不整形円形を呈する。
遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-097 (第28図、図版13)

調査区の中央付近、5M84グリッドに位置する。
平面プランは径34×28cm、深さ52cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-100 (第28図)

調査区の中央付近、5M85グリッドに位置する。
平面プランは径40×36cm、深さ19cmの楕円形を呈する。
遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-101 (第28図、図版13)

調査区の中央付近、5M94グリッドに位置する。
平面プランは径38×37cm、深さ10cmの不整形形を呈する。
遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-102 (第28図、図版13)

調査区の中央付近、5M94グリッドに位置する。
平面プランは径24×21cm、深さ8cmの楕円形を呈する。
遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-103 (第28図、図版13)

調査区の中央付近、5M94グリッドに位置する。
平面プランは径44×39cm、深さ31cmの不整形形を呈する。
遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-104 (第28図、図版13)

調査区の中央付近、5M94グリッドに位置する。
平面プランは径29×22cm、深さ58cmの楕円形を呈する。
遺物は覆土中から縄文時代土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代と考えられる。

SH-105 (第28図)

調査区の中央付近、6M04グリッドに位置する。
平面プランは径27×22cm、深さ57cmの楕円形を呈する。
遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-106 (第28図)

調査区の中央付近、5M94グリッドに位置する。
平面プランは径25×23cm、深さ19cmの不整形形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-108 (第28図)

調査区の中央付近、5M95グリッドに位置する。

平面プランは径23×20cm、深さ42cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半捻糸文末期と考えられる。

SH-109 (第28図)

調査区の中央付近、5M75グリッドに位置する。

平面プランは径29×25cm、深さ21cmの楕円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-110 (第28図、図版13)

調査区の中央付近、5M74グリッドに位置する。

平面プランは径22×19cm、深さ35cmの楕円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-111 (第28図、図版13)

調査区の北側、5M42グリッドに位置する。

平面プランは径48×34cm、深さ17cmの楕円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-112 (第28図、図版13)

調査区の北側、5M42グリッドに位置する。

平面プランは径37×36cm、深さ26cmの円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代と考えられる。

SH-113 (第28図)

調査区の北側、5M44グリッドに位置する。

平面プランは径34×28cm、深さ31cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半捻糸文末期と考えられる。

SH-121 (第24図、図版12)

調査区の北側、5M44グリッドに位置する。SK-122(土坑)と重複する。

平面プランは径38×28cm、深さ22cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半または末期と考えられる。

SH-123 (第24図、図版12)

調査区の北側、5M44グリッドに位置する。SK-122(土坑)と重複する。

平面プランは短径24cm、深さ36cmの楕円形を呈すると考えられる。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半または末期と考えられる。

SH-127 (第28図)

調査区の北東側、5M44グリッドに位置する。

平面プランは径35×27cm、深さ33cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から礫が1点出土した。覆土の状態から所属時期は縄文時代と考えられる。

SH-128 (第27図)

調査区の北東側、5M44グリッドに位置する。

平面プランは径31×26cm、深さ35cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代土器片が出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代と考えられる。

SH-129 (第28図、図版13)

調査区の北側、5M54グリッドに位置する。

平面プランは径29×23cm、深さ30cmの楕円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-130 (第28図、図版12・13)

調査区の北側、5M44グリッドに位置する。

平面プランは径37×23cm、深さ27cmの楕円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-133 (第28図)

調査区の北側、5M54グリッドに位置する。

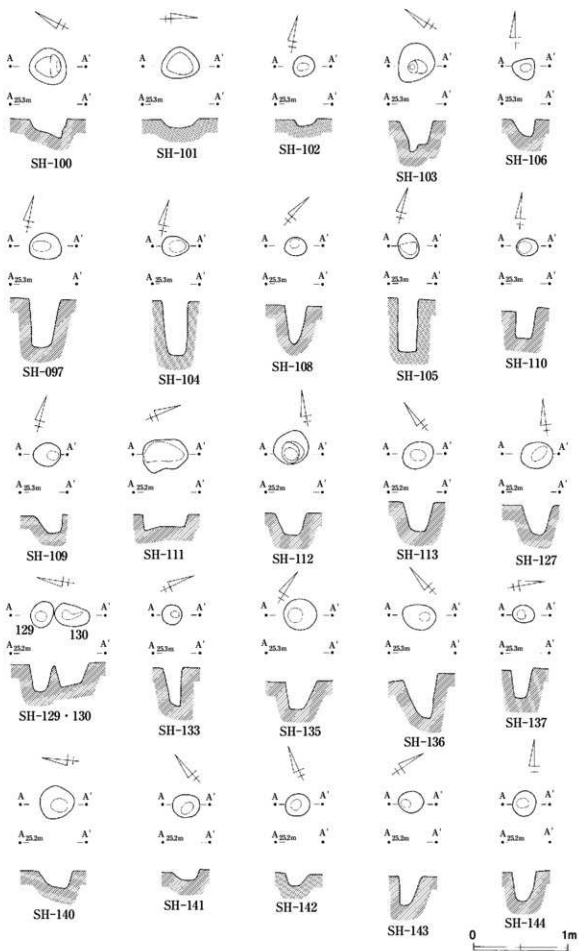
平面プランは径21×21cm、深さ36cmの円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-134 (第27図)

調査区の北側、5M53グリッドに位置する。

平面プランは径30×26cm、深さ13cmの楕円形を呈する。



第28図 ピット (SH) (3)

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半撚糸文末期と考えられる。

SH-135 (第28図、図版13)

調査区の中央付近、5M74グリッドに位置する。
平面プランは径35×33cm、深さ30cmの円形を呈する。
遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-136 (第28図、図版13)

調査区の中央付近、5M84グリッドに位置する。
平面プランは径36×27cm、深さ49cmの楕円形を呈する。
遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-137 (第28図、図版13)

調査区の北側、5M63グリッドに位置する。
平面プランは径24×19cm、深さ31cmの楕円形を呈する。
遺物は覆土中から礫が1点出土した。覆土の状態から所属時期は縄文時代と考えられる。

SH-140 (第28図、図版12・13)

調査区の北側、5M42グリッドに位置する。
平面プランは径38×34cm、深さ22cmの楕円形を呈する。
遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半撚糸文末期と考えられる。

SH-141 (第28図、図版12・13)

調査区の北側、5M32グリッドに位置する。
平面プランは径30×25cm、深さ11cmの楕円形を呈する。
遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-142 (第28図、図版12・13)

調査区の北側、5M32グリッドに位置する。
平面プランは径25×23cm、深さ13cmの楕円形を呈する。
遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-143 (第28図、図版12・13)

調査区の北側、5M32グリッドに位置する。
平面プランは径26×23cm、深さ31cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から礫が1点出土した。覆土の状態から所属時期は縄文時代と考えられる。

SH-144 (第28図、図版12・13)

調査区の北側、5M32グリッドに位置する。

平面プランは径27×24cm、深さ31cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-145 (第29図、図版12・13)

調査区の北側、5M32グリッドに位置する。SI-010(堅穴住居跡)と重複する。

平面プランは径20×18cm、深さ26cmの円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-146 (第29図、図版13)

調査区の北側、5M33グリッドに位置する。SI-010(堅穴住居跡:古)と重複する。

平面プランは径18×17cm、深さ16cmの円形を呈する。

遺物は覆土中から礫が1点出土した。覆土の状態から所属時期は縄文時代と考えられる。

SH-147 (第29図、図版12)

調査区の北側、5M22グリッドに位置する。

平面プランは径32×27cm、深さ38cmの楕円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-148 (第29図、図版13)

調査区の北側、5M32グリッドに位置する。

平面プランは径37×35cm、深さ40cmの円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-149 (第29図)

調査区の中央付近、5M85グリッドに位置する。SH-150(ピット)と重複する。

平面プランは径26×23cm、深さ24cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代土器片が出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代と考えられる。

SH-150 (第29図)

調査区の中央付近、5M85グリッドに位置する。SH-149(ピット)と重複する。

平面プランは径25×24cm、深さ43cmの円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-151 (第29図、図版6)

調査区の北側、5M53グリッドに位置する。

平面プランは径25×22cm、深さ8cmの楕円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-152 (第29図、図版13)

調査区の北側、5M42・43グリッドに位置する。

平面プランは径36×36cm、深さ26cmの円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-153 (第29図)

調査区の北側、5M43グリッドに位置する。

平面プランは径20×18cm、深さ20cmの円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代前期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代前期と考えられる。

SH-154 (第29図、図版13)

調査区の西側、5M60・70グリッドに位置する。

平面プランは径34×26cm、深さ61cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-155 (第29図、図版13)

調査区の西側、5M60・61グリッドに位置する。

平面プランは径39×35cm、深さ10cmの楕円形を呈する。

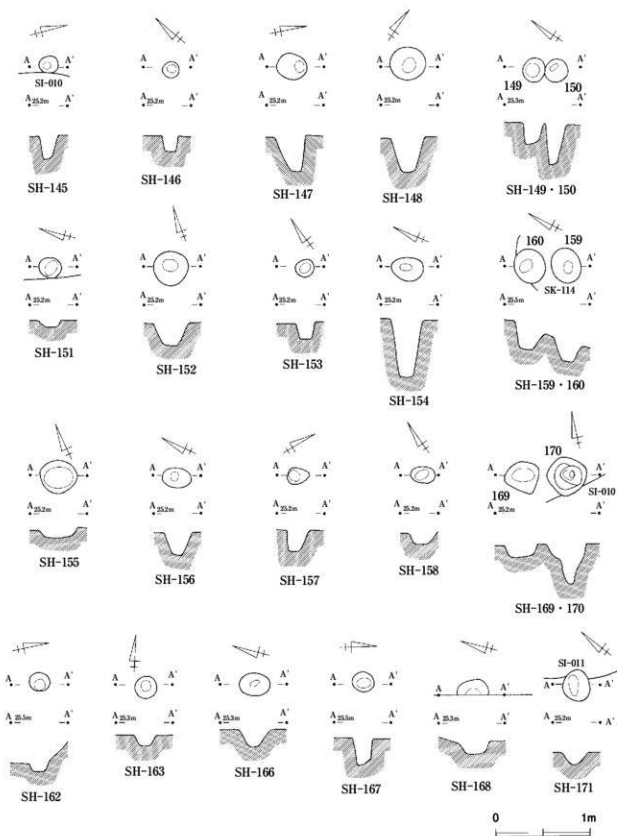
遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-156 (第29図、図版13)

調査区の西側、5M61グリッドに位置する。

平面プランは径32×21cm、深さ24cmの楕円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。



第29図 ピット (SH) (4)

SH-157 (第29図、図版13)

調査区の西側、5M61グリッドに位置する。

平面プランは径23×18cm、深さ23cmの不整形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-158 (第29図、図版13)

調査区の西側、5M61グリッドに位置する。

平面プランは径26×18cm、深さ13cmの楕円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-159 (第29図、図版13)

調査区の南東側、6M57グリッドに位置する。SK-114 (土坑) と重複する。

平面プランは径37×31cm、深さ29cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代と考えられる。

SH-160 (第29図、図版13)

調査区の南東側、6M57グリッドに位置する。SK-114 (土坑) と重複する。

平面プランは径37×32cm、深さ29cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-162 (第29図、図版13)

調査区の南東側、6M56・66グリッドに位置する。風倒木により上面は壊されている。

平面プランは径22×19cm、深さ15cmの楕円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-163 (第29図)

調査区の中央付近、6M16グリッドに位置する。

平面プランは径23×23cm、深さ15cmの楕円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-166 (第29図)

調査区の南側、6M35グリッドに位置する。

平面プランは径32×25cm、深さ20cmの楕円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-167 (第29図、図版13)

調査区の南東側、6M56グリッドに位置する。

平面プランは径23×21cm、深さ30cmの円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-168 (第29図)

調査区の北側、5M73グリッドに位置する。西側は調査区域外である。

平面プランは長径32cm、深さ12cmの円形を呈する。

遺物は覆土中から縄文時代早期土器片が少量出土した。所属時期は出土土器などから縄文時代早期前半燃糸文末期と考えられる。

SH-169 (第29図、図版8・12・13)

調査区の北東側、5M33グリッドに位置する。

平面プランは径37×34cm、深さ16cmの不整形円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-170 (第29図、図版8)

調査区の北東側、5M23グリッドに位置する。SI-010(竪穴住居跡)と重複する。

平面プランは径41×39cm、深さ44cmの円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

SH-171 (第29図、図版8)

調査区の北側、5M22グリッドに位置する。SI-011(竪穴住居跡)と重複する。

平面プランは径33×29cm、深さ15cmの円形を呈する。

遺物は出土しなかった。所属時期は覆土から縄文時代と考えられる。

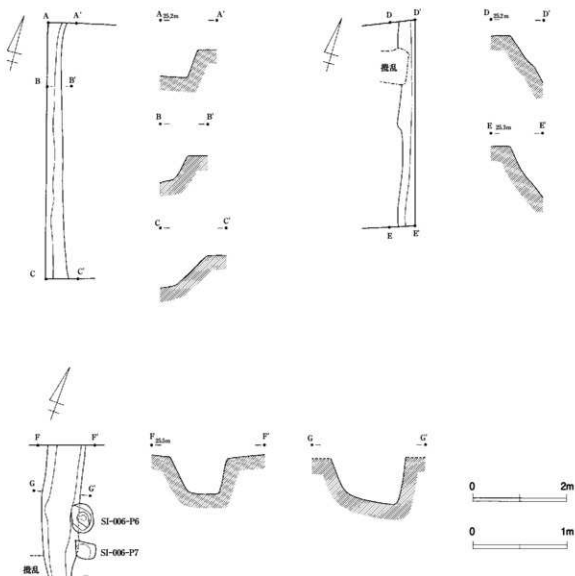
5. 溝状遺構

SD-007 (第30図、図版5・13)

調査区の西側を北側の調査区域外から南側の調査区域外に向かって走っている(5M20～6M74)。SI-006(竪穴住居跡：古)と重複する。また、一部が調査区域外である。

規模は調査区域内で長さ13.4m(合計)、幅75～81cm、深さ16～41cmを測る。

遺物は覆土中から流れ込みと考えられる縄文土器片などが出土した。所属時期は覆土の状態などから近世以降と考えられる。



第30図 SD-007

6. 第Ⅱ章のまとめ

i. 船橋市内の縄文時代早期に属する遺跡について

船橋市内の代表的な縄文時代早期に属する遺跡は船橋市海神に所在する市史跡の飛ノ台貝塚である。市内には縄文時代早期に属する包蔵地が29遺跡確認されている。しかし発掘調査で明らかになった遺跡は18遺跡だけである。細かな時期別に見ていくと燃糸文期の遺跡が8遺跡（取掛西貝塚、中野木台遺跡、中野木新山遺跡、新山貝塚、上ホシ遺跡、小室台遺跡・小室上台遺跡、桑納川遺跡群）、沈線文期の遺跡が1遺跡（藤原観音堂貝塚）、条痕文期の遺跡が9遺跡（藤崎台遺跡、宮下田遺跡、小室木駄橋遺跡、西ノ台遺跡、佐倉道南遺跡、夏見台遺跡、北台次遺跡、飛ノ台貝塚、東中山台遺跡群）である。これらのうち取掛西貝塚、中野木台遺跡、中野木新山遺跡、新山貝塚、上ホシ遺跡、藤原観音堂貝塚、藤崎台遺跡、宮下田遺跡、夏見台遺跡、北台次遺跡、飛ノ台貝塚、東中山台遺跡群が東京湾水系に位置する遺

跡である。一方小室台遺跡、小室上台遺跡、桑納川遺跡群、小室木駄橋遺跡、西ノ台遺跡は伊藤沼の水系に位置する遺跡である。調査事例の多い東京湾水系に属する遺跡が多い結果となっている。また、これらの遺跡のうち当該期の貝塚を含むものは取掛西貝塚、藤崎台遺跡（土坑に小規模の貝ブロック）、北台次遺跡（土坑に小規模の貝ブロック）、飛ノ台貝塚だけであり決して多くない。しかも撚糸文期の貝塚は取掛西貝塚1遺跡だけである。そして取掛西貝塚は汽水系のヤマトシジミを主体とした貝層、飛ノ台貝塚は灌水系のハイガイなどを主体とした貝層である。このことから実年代で3000年の間に気温の上昇、地形の変化があったものと考えられる。

ii. 検出された縄文時代早期竪穴住居跡の特徴について（第31・32図）

船橋市内で調査された縄文時代早期に属する竪穴住居跡は決して多くない。条痕文期の竪穴住居跡もしくは竪穴住居跡の可能性のあるものは飛ノ台貝塚から10軒、佐倉道南遺跡から4軒、撚糸文期の竪穴住居跡もしくは竪穴住居跡の可能性のあるものは中野木台遺跡から1軒、新山貝塚から1軒、小室台遺跡から10軒（現在整理作業中）検出されている。今回の調査で検出された縄文時代早期竪穴住居跡は撚糸文期の最終末と考えられる。時期的には中野木台遺跡、新山貝塚、小室台遺跡から検出された竪穴住居跡が撚糸文期後半と考えられることからそれに続く時期である。

市内で検出された縄文時代早期に属する竪穴住居跡の共通点をあげると下記のとおりである。

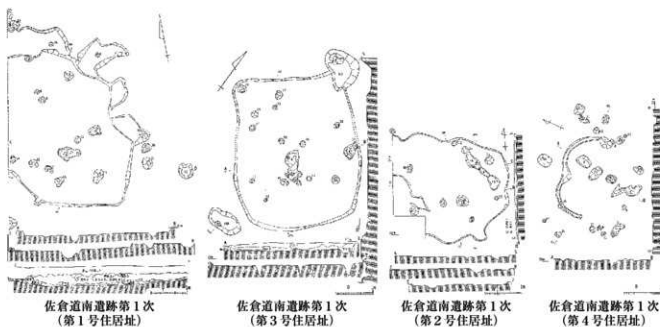
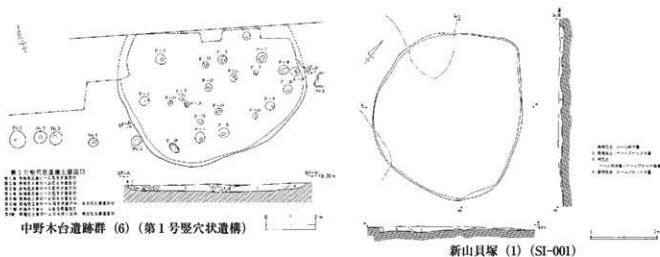
1. 掘り込みがⅢ層（ソフトルーム）に達しないものや僅かしか掘り込んでいないものが多い。
2. 炉跡が明確なものが少ない。
3. 平面プラン・規模のバラつきが大きい。

今回検出された縄文時代早期の竪穴住居跡10軒のうち上記3点とも該当するものはSI-006・008A・009・010・011・012・015であった。逆にSI-002・003・004は掘り込みもしっかりしており、特にSI-002は炉跡もしっかりと検出された。また、構造的な共通点ではないが3軒とも量的に差はあるものの覆土中にヤマトシジミを主体とした貝層を伴っていた。これらのことからSI-006・008A・009・010・011・012・015のグループとSI-002・003・004のグループに分けることが可能である。しかし、SI-002・003・004も細かくみていくと相違点が見られる。3軒とも掘り込みはⅡ層中から確認でき、ハードルームまで達する比較的しっかりした掘り込みであった。住居内の構造はSI-002・004の2軒が床面中央付近が1段低い構造なのに対してSI-003の床面はほぼ平らである。炉跡はSI-002が方形を呈する明確な灰床炉を有し、SI-004も中央付近のピットを炉跡と考えると比較的しっかりとした炉を有していた可能性がある。SI-003は一部調査区域外のためはっきりとは言えないが炉跡は確認できなかった。平面プランはSI-002が隅丸方形、SI-003・004が不整形円形であった。

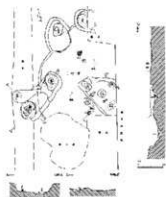
これら2グループ間の相違は時間的な差を現しているのか集団の差を現しているのか現段階では不明である。また、グループ内での細かな差異も現段階では不明である。

また、両グループに共通することは、竪穴住居内に明らかに煮炊きを主目的とした炉がないことである。SI-002の灰床炉は煮炊きが目ではなく暖・明かり・火種が目的と考えられる。このことは時期的に下がるが条痕文期の飛ノ台貝塚検出の竪穴住居跡にも同じ傾向がみられる。条痕文期の飛ノ台貝塚の場合は屋外に炉穴を設けて煮炊き用の施設としており10軒の竪穴住居跡もしくは竪穴住居跡の可能性のあるもののうち灰床炉と考えられるもの（第12号住居跡・第13号住居跡・4次第4号住居跡）が3軒、

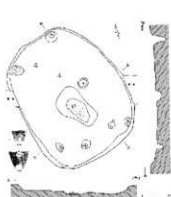
不明（未検出を含む）のものが6軒、焼土をしっかりと伴う炉をもつもの1軒であった。今回の調査ではSK-131から多くの被熱した礫と土器片（無文土器群）が出土した。また、覆土中には僅かであるが焼土もみられた。このことからSK-131は屋外炉と考えられる。このことは明確な炉をもたない竪穴住居跡や灰床炉をもつ竪穴住居跡と屋外炉がセット関係にあることを現していると考えられる。



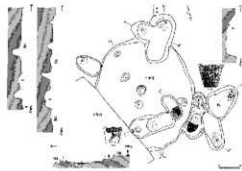
第31図 市内検出縄文時代早期竪穴住居跡 (1)



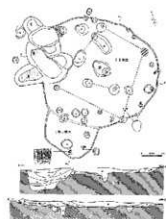
飛ノ台具塚1・2次 (1号住)



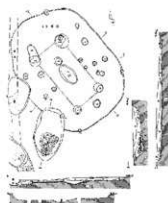
飛ノ台具塚1・2次 (5号住)



飛ノ台具塚1・2次 (7号住)



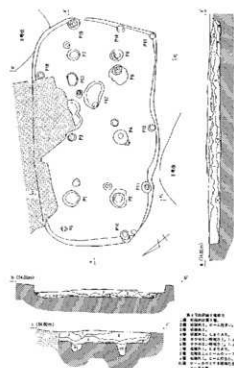
飛ノ台具塚1・2次
(12号住・4号小堅穴)



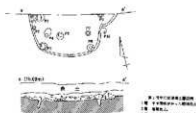
飛ノ台具塚1・2次 (13号住)



飛ノ台具塚1・2次 (15号住)



飛ノ台具塚4次 (第4号住居跡)



飛ノ台具塚4次 (第1号堅穴状遺構)



飛ノ台具塚4次 (第2号堅穴状遺構)

第32図 市内検出縄文時代早期堅穴住居跡 (2)

参考文献

- 八幡一郎・新津健 1975『佐倉道南－縄文時代早期集落址の発掘調査』船橋市教育委員会
- 岡崎文喜・新津健ほか 1977『佐倉道南 C地点における縄文時代早・前期集落址の発掘調査』佐倉道南遺跡調査団
- 下津谷達男 1977『中野木新山遺跡』中野木新山遺跡調査団
- 原田昌幸 1983『土曜考古』第7号「撫糸文期の竪穴住居跡－資料の集成とその解題的研究－」土曜考古学研究会
- 新井和之 1985『西の台（第2次）』船橋市遺跡調査会
- 金子直行ほか 1991『小室上台遺跡』船橋市教育委員会・船橋市遺跡調査会・本覚寺
- 小村正之 1995『小室木取橋遺跡』船橋市遺跡調査会
- 清水理史 1999『藤崎台遺跡』都築八重子・熊手和子・都築武雄・宮野晴美・矢後光江・平野澄江・財団法人船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター
- 中村宜弘 1999『飛ノ台貝塚第4次発掘調査報告書』船橋市教育委員会
- 須塚正浩 2000『千葉県の歴史 資料編 考古1』『佐倉道南遺跡』財団法人千葉県史料研究財団
- 石坂雅樹 1999『平成10年度 船橋市内遺跡発掘調査報告書』『中野木台遺跡群（6）』船橋市教育委員会
- 栗原薫子 2003『宮下田遺跡』宍倉春一・船橋市教育委員会
- 中村宜弘 2004『飛ノ台史跡公園博物館 紀要』創刊号「飛ノ台貝塚検出の住居跡について－第1・2次調査の検出住居跡を中心に－」飛ノ台史跡公園博物館
- 小中美幸 2006『平成17年度 船橋市内遺跡発掘調査報告書』『新山貝塚（1）』船橋市教育委員会
- 道上文・須田亜紀 2007『東中山台遺跡群（36）』藤和不動産株式会社・株式会社プロバイスコーポレーション・船橋市教育委員会
- 西川博孝 2008『飛ノ台史跡公園博物館 紀要』第5号「飛ノ台貝塚第1・2次調査出土土器の考察」飛ノ台史跡公園博物館
- 石坂雅樹 2009『考古学ジャーナル』5月号 №585「遺跡情報 千葉県取掛西貝塚」ニューサイエンス社
- 石坂雅樹 2009『季刊 考古学』109号「最近の発掘から 縄文時代早期前半の貝塚調査－千葉県船橋市取掛西貝塚－」
- 小林理恵・沼野健一 2012『東中山台遺跡群（51）』株式会社御田鉦製作所・船橋市教育委員会

Ⅲ 取掛西貝塚の動物遺体について

西本豊弘・石坂雅樹

1. はじめに

取掛西貝塚の平成20年度の発掘調査で、縄文時代早期前半の住居跡の窪地からヤマトシジミを主体とする貝層が発見された。貝層はSI-002・003・004・006、SK-005の竪穴住居跡4軒、土坑1基の覆土中から検出された。その中でSI-002竪穴住居跡の貝層は保存状況がよく、貝層中からツノガイ製の管玉が採集された。そのため貝層をすべて採集し（採取サンプルはSI-002が土糞527袋、SI-003が土糞28袋、SI-004が土糞100袋、SK-005が土糞21袋）、篩による乾燥選別作業を行った。この作業の結果、多量の貝玉と動物遺体が採集された。ツノガイ製の玉は2200点以上になり、その内容の一部は展示により公開されている。貝層サンプルは乾燥後、全て5mmと3mmの篩にかけ、貝、動物遺体、炭化物、ツノガイ類貝製品、土器、石器に仕分けを行なった。貝はヤマトシジミとその他の貝に分類した。動物遺体は獣骨・鳥骨・魚骨に分類し、獣骨・鳥骨については同定可能なものは種と部位の同定を行ない数量のカウントを行なった。炭化物については植物種実類（炭化核・炭化種子）の抜き取りを行ない、種の判明するものは数量のカウントを行なった。ここでは哺乳類・鳥類の内容を報告する。

動物遺体の出土状況の中で特筆すべきことは、SI-002竪穴住居跡の貝層最下部から骨が集中して発見されたことである。その骨集中は、住居跡のくぼみの東部にイノシシとシカの頭部を中心に出土しており、貝層内の動物骨が散乱状態で出土していることと比較すると、意図的な行為が伺える。また、それらの中には焼かれているものがあり、何らかの意図がうかがえる。そのため、この骨集中とその他の貝層出土の動物遺体を分けて内容を説明する。なお、貝層出土の魚類についてはⅡにて報告する。

2. SI-002竪穴住居跡骨集中の動物遺体出土の動物遺体

SI-002竪穴住居跡東側の覆土の貝層直下から動物骨が集中して発見された。住居跡の壁近くの覆土は断面が三角状に堆積していたが、その覆土の上から、イノシシとシカの頭蓋骨や下顎骨、四肢骨が集中して出土した。ヤマトシジミが骨集中の骨の下にも見られることから、貝層が形成された当初の時期と推定される。それらの骨の分布範囲は長さ約3.5m、幅約1.5mであった。その範囲の動物遺体は1点づつ番号を付けて取り上げられた。その内容は表9に示した。シカとイノシシの他にタヌキが含まれる。鳥類ではハクチョウとキジが認められた。

i. イノシシについて

骨集中の出土骨は約150点であり、そのうちイノシシは86点と最も多く、骨集中の主体はイノシシである。骨集中の動物骨の分布状態を写真と第33図で示したが、骨集中の中央部にイノシシの頭蓋骨4個がまとまって置かれていた。骨集中の中央部を見ると、住居の壁近くの斜面の一番上にイノシシ下顎骨連合部が底面を上にした状態で左側に先端を向けて置かれており、その下に口蓋面を上にして右側に先端を向けて頭蓋骨（No531：若獣）があり、その下に図の左側を向いて上面を上にして頭蓋骨（No523：雄成獣）がある。その下に右側を向いて上面を上にして頭蓋骨（No509：成獣）が見られた。頭蓋骨No523の右側には口蓋面を上にして先端を壁方向に向けて頭蓋骨（No536：雄成獣）が置かれていた。これらのイノシシの頭蓋骨は、下



第33圖 SI-002動物骨集中箇所微細圖

顎骨とは別個に頭蓋骨のみで並べられていた。そして、No.509は後頭部がよく焼かれて黒褐色を呈しており、ばらばらに壊れていた。No.523も一部分焼けていたが、No.509の後頭部付近が最もよく焼けていると思われる。貝殻も焼けていることから、この骨集中が置かれてから、この場所で焼かれたと推測される。意図的に焼かれたと思われる範囲は図に示した通りである。イノシシ頭蓋骨は、この4点の他に、鹿角近くの幼獣（No.425）と骨集中の右上の成獣（No.473:雌?成獣）とその下方の亜成獣（No.524）の7点である。年齢別に見ると、生後6カ月程度の幼獣1個体と生後1年半の若獣1個体、生後2歳～25歳の亜成獣1個体・成獣4個体の計7個体分である。性別は、雄成獣3個体で雌?成獣1個体であった。

この骨集中に含まれるイノシシの四肢骨は、これらの7個体分としては出土量が少ない。そのため、この骨集中は、頭蓋骨と下顎骨を中心に意図的に作られたものであろう。

ii. シカについて

シカの骨については、よく成育した角と頭蓋が骨集中の北側に倒れた状態で出土した。この角は角突起と角座を持つので秋から春に捕獲された個体の角であろう。先端近くは火を受けて一部分が黒くなっていた。骨集中の中央部に建てられていたものが倒れたものと推測される。この角とは別に、少し若い雄の後頭部が、この角の中間部近くで出土した。良く焼けて全体に黒色を呈していた。この個体には左右の角突起があり、小さいことから角だけの個体とは別個体である。この他にシカの後頭部のみ破片が骨集中の南部でみられた。後頭部の形態から見て雄の個体である。この骨は後頭部の頂部が切り取られており、意図的に頭頂部に穴をあけたものと思われる。このような孔をあけたシカの後頭部は後期ではよく知られていたが、縄文早期までさかのぼる事例は初めてである。なお、この個体と角だけの個体とは同一個体の可能性がある。しかし、シカの上顎骨の左側が3個体分あることから、骨集中ではシカは少なくとも3個体含まれていると言える。そのうち2個体は雄である。またすべて成獣の可能性がある。シカの四肢骨も見られるが、3個体分はなく、頭部を主体にここに廃棄されたものであろう。

iii. その他の動物

シカ・イノシシ以外の動物ではタヌキとハクチョウとキジが含まれていた。タヌキは、貝層でも多く出土しているので、本来は貝層に捨てられたものが、この骨集中に混じっていた可能性がある。しかし、下顎骨が3点であることから、意図的にこの骨集中に加えられた可能性が高い。ハクチョウとキジは、四肢骨破片であるため偶然に混入した可能性が高い。

3. SI-002竪穴住居跡骨集中以外の動物遺体

骨集中以外の貝層からも獣骨が17,069点（骨片含む）、鳥骨24,188点（骨片含む）を出土している。これらの動物骨は食糧などに利用された後に貝殻と同様に捨てられたものである。

i. 獣骨について

シカとイノシシが主体であり、その他にタヌキ・キツネ・アナグマ・テン・ムササビ・ニホンザルが含まれていた。

表9 SI-002動物骨集中箇所出土獣骨数量表

部位	L/R	残存部分	イノシシ	シカ	タヌキ	オオハクチョウ	キジ	その他
頰骨			乳岩様骨 1 (L) 1・(R) 1	2、岩様骨 (L) 1				
上顎骨	L		3	3				
	R		4	1				
下顎骨	L		3	1	2			
	R		2	2	1			
歯槽骨			12	5				
頬骨				2				
髁骨			2	2				
肩甲骨	L		1	1				
	R		1	1			1	
上腕骨	L	完存 近位部 遠位部	2・(若) 1	1				
	R	完存 近位部 遠位部	1・(壊滅) 1					
腕骨	L	完存 近位部 遠位部	1 1	1				
	R	完存 近位部 遠位部	(壊滅) 1 (若) 1					
尺骨	L	完存 近位部 遠位部	(若) 1		1			1
	R	完存 近位部 遠位部	(若) 2					
掌骨	L		1		1			
	R		1・(壊) 1					
大趾骨	L	完存 近位部 遠位部	(若) 1 1・(若) 2	(若) 1			2 3	
	R	完存 近位部 遠位部	(若) 1	1			1	
指骨	L	完存 近位部 遠位部		1 1				
	R	完存 近位部 遠位部	(若) 1	1				
中手骨	L	完存 近位部 遠位部				1		
	R	完存 近位部 遠位部		1		1	1	
中足骨	L	完存 近位部 遠位部					1	
踵骨	L		1					
	R		1					
距骨	L		1					
	R		1					
跗骨			1	1・(壊滅) 1	1			
跖骨			(若) 3	1・(若) 1				
跰骨				1				
跰骨			2	1				
趾骨			6	2				
中趾骨			4	1				
末趾骨				2				
その他			中手骨 (L・壊2) 1・ (R・壊4) 2、中足 骨 (L・壊5) 1、中 手骨・中足骨 (不明 1)、手根骨 1	再 3		趾骨 1		ホレイ指骨 1、マブ ロ指骨 1

イノシシが最も多く上下顎骨から最小個体数を推測すると幼獣4個体・若獣4個体・成獣2個体の計10個体である。シカは幼獣2個体・成獣2個体の計4個体である。シカ・イノシシともに四肢骨も多く出土している。それらの出土量は上下顎骨から推計される個体数に比べて少ないが普通の貝塚で見られる程度であり、骨集中に見られるほど頭蓋部が多くはない。

シカ・イノシシ以外ではタヌキとウサギが多い。ウサギは早期の遺跡でよく出土する種であり、縄文時代の当初からよく利用されている動物である。タヌキが比較的多いことは、この時期の関東地方はかなり暖かいことを示している。その他の獣類では出土量は少ないがテン・ムササビ・キツネ・アナグマ・ニホンザルなど関東地方の縄文時代の主要な狩猟獣がそろっている。この時期にはすでに安定した狩猟活動が行われていたと推測される。

ii. 鳥類について

この遺跡の動物遺体の特徴の一つは、鳥類が多いことである。これは、発掘調査で、貝層がすべて採集され篩による乾燥選別をされて小さな遺物まで採集されたことが背景にある。しかし、同様の篩による乾燥選別が行われても動物骨の出土量が少ない遺跡がある中で、この遺跡の鳥骨の多さは特筆すべきものである。

さて、鳥類の内容はキジ類(キジとヤマドリ)とガンカモ類が最も多く、次にツグミ類が多く、その他にヤマゲラ類・ウミスズメ類・カイツブリ類・スズメ類が少量含まれていた。キジ類はキジとヤマドリの区別ができないので両種を合わせたものである。頭部のくちばしの骨から指骨まで全身の骨が見られ、少なくとも34個体以上含まれている。ガンカモ類は最も大きなオオハクチョウや大型のガン類であるヒシクイ類や小型のガン類があり、マガモやカンガモなどの大型のカモ類と中型のカモ類や小さなコガモまで多くの種が捕獲されていた。その中では大型のカモ類と中型のカモ類が多い。小型の鳥類ではツグミ類が多い。ツグミ類の中では「ツグミ」程度の小さな種が多い。ツグミ程度の小鳥の骨はあまり採集されないので種同定を行うことも少ないが、これほど多くのツグミ類が出土した例はなく、縄文人の鳥類利用の新しい発見である。小型の鳥類ではキツツキ類の小型種の子ヤマガラ類やウミスズメ類の他にスズメ類も含まれていた。これらの種は小さいことと種が多いことから種同定はできなかった。

4. SI-002竪穴住居跡以外の動物遺体

これまでSI-002竪穴住居跡出土の動物遺体を見てきたが、SI-003・004・005竪穴住居跡の貝層からも動物骨が出土している。しかし、それらの動物骨の出土量は少なく、特徴はよく分からない。基本的にSI-002竪穴住居跡の動物と変わらないであろう。

5. 第三章のまとめ

以上、この遺跡の鳥類と哺乳類の内容を紹介してきた。その特徴は、第1にSI-002竪穴住居跡の窪地にシカとイノシシの頭部を主体とした骨集中が認められたことである。それらの骨は、頭部が多いということの他に意図的に焼かれていることから、儀礼的な扱いを受けていると推測される。どのような骨の扱いを儀礼とするかは研究者によって異なるが、頭骨を複数以上とそれらに配列がみられること、さらに火で焼くという行為が行われていることから、儀礼的扱いであると筆者等は考えている。そして、この例を動

物儀礼とするならば、縄文時代で最も古い動物儀礼の証拠と言える。この儀礼は、この遺跡で偶然発見されたが、貝層を伴っていたことで現在まで残ったのであろう。おそらく、もっと多くの動物儀礼が住居跡の窪地で行われたと想定される。このような儀礼がどのような意味を持っていたか。今後の研究課題であらう。

表12 SI-003出土獣骨数量表

部位	L/R	残存部分	イノシシ	シカ	タヌキ	ウサギ	その他
頭蓋骨			後頭部 1	後頭部 1・後頭部 1・唇 骨 (R) 1	(L) 1		
上顎骨	L		永久歯 2	永久歯 1	永久歯 2		
	R		永久歯 2		永久歯 1		
下顎骨	L			永久歯 2	永久歯 1		
	R		永久歯 1	永久歯 1・(乳歯 1) 関節 突起 1	1	1	
遊離歯						6	キアモ 遊離歯 1
肩甲骨	L			1			
上腕骨	L	完存 近位部 遠位部	1				
	R	完存 近位部 遠位部				1	ムササビ 1・1 (新)
腕骨	L	完存 近位部 遠位部			1		
	R	完存 近位部 遠位部			1		
尺骨	L	完存 近位部 遠位部	1	1		1	
	R	完存 近位部 遠位部			1		
掌骨	L			1		1	
	R						
大頰骨	R	完存 近位部 遠位部		1			
胸椎			1				
腰椎			5	1			
椎骨					1		
尾椎骨			3				
尾節骨				1			
その他			下顎骨 (下顎連合部) 1、 歯片 8、腭骨片 1、中足 骨 (LR不明 遠位部) 1	歯片 1、距骨 (R) 1、中 足骨 (LR不明 骨幹部) 1	脛骨 (L 近位部) 1、中 手骨 (L 近位部) 1		獣 歯片 18、獣 尺骨 (骨 幹部) 1、獣 椎骨片 1、 獣 骨片 853

表13 SI-004出土獣骨数量表

部位	L/R	残存部分	イノシシ	シカ	ヌメキ	ウサギ	獣	その他
頭蓋骨			口の付近(L)1、 右頬骨(R)1、 骨片11、骨片3	中心部付近1	頭蓋上部1			
上顎骨	L R		永久歯3・乳歯2	永久歯1	永久歯1 永久歯1			
下顎骨	L R		間部突起1、永久歯3	永久歯1	1、永久歯1		間部部分(破片)1	
歯槽骨			9		1	1		中型獣1
頬骨				(破)1				
前甲骨	L R		3		1			大型獣1
上腕骨	L	定存 近位部 遠位部				1		
	R	定存 近位部 遠位部		1		1		
腕骨	L	定存 近位部 遠位部		2				
	R	定存 近位部 遠位部		1・(破)1		1		
尺骨	L	定存 近位部 遠位部	1					
	R	定存 近位部 遠位部	1			1		
寛骨	L		1			2		
	R L・R不明		2					
大腿骨	L	定存 近位部 遠位部	1	1		1		中型獣1
	R	定存 近位部 遠位部		1・(若)1				
脛骨	L	定存 近位部 遠位部		3				
	R	定存 近位部 遠位部	(若)1	1		1		
中手骨・中 尾骨	L	定存 近位部 遠位部		1				
	LR不明	定存 近位部 遠位部	2 3・(若)1	1 1				
踵骨	L		1					
	R		1					
距骨	L R		1	2				
原椎				1	第5原椎1			
胸椎				4	1			
仙椎			1	1				
尾椎			1					大型獣1
肋骨			3	3				
恥骨			14	3				
坐骨			1	1				
尾節骨			9	2				
その他			骨片6、脛骨(幼)(R) 骨幹部)1、手根骨 (R)1	角1、3歳以上1、 骨片14、中手骨(L或 R)1・(LR不明)遠 位)1・(LR不明)骨 幹部)2、中尾骨(LR 不明)骨幹部)1、手 根骨(LR不明)1、 種子骨2	骨片2、椎骨1		骨片9、胸骨片1、 大腿骨片33、骨片 297	

表14 SK-005出土獣骨数量表

部位	L/R	残存部分	イノシシ	タヌキ	その他
頭蓋骨			若齢骨 1		
上顎骨	L			永久歯 1	
	R		永久歯 1	永久歯 1	
下顎骨	L				シカ 永久歯 1
	R			永久歯 1	
中趾骨			1		
その他			中手骨 (L,R不明 完存) 1, 中手骨・中趾骨 (L,R不明 完存) 1		獣 骨片 6, 獣 骨片 185

表15 SI-003出土鳥骨数量表

部位	L/R	残存部分	キジ類	ツグミ類	中型鳥	鳥
鳥口骨	L	完存 近位部 遠位部		1		
橈骨	R	完存 近位部 遠位部			1	
尺骨	L	完存 近位部 遠位部	1			
	R	完存 近位部 遠位部				小型鳥 1
脛骨	R	完存 近位部 遠位部			1	
中手骨	L	完存 近位部 遠位部				ハクチョウ類 (成) 1 カモ類 1
	R	完存 近位部 遠位部	(成) 1 (成) 2			
中趾骨	L	完存 近位部 遠位部		1		
跗跖骨			1			
			3			5
その他			雛爪 (L) 1			尺骨片 (L,R不明 遠位) 1, 跗骨片 (L,近位) 1, 骨体 13, 骨片 69

表16 SI-004出土鳥骨數量表

部位	L/R	残存部分	カモ類	ガン・カモ類	キン類	ツグミ類	中型鳥	小型鳥	鳥	その他
脚蹠骨			方形骨 (L) 1	方形骨 (R) 1					方形骨片 (R) 1	
頰骨		中央部分			2				1	
	L	近位部			1					
	R	近位部								
鳥口骨	L	完存 近位部 遠位部	1		1	1				
	R	完存 近位部 遠位部	1 (鳩) 1		1				1	
肩甲骨	L				1					
	R		1		2					
上腕骨	L	完存 近位部 遠位部				2				
	R	完存 近位部 遠位部			1・(成) 1 1・(成) 1					ハクチョウ類 1
腕骨	L	完存 近位部 遠位部	2 1		4 2				鱗片 1	
	R	完存 近位部 遠位部			1					
尺骨	L	完存 近位部 遠位部	(成) 1		1 2・(成) 1			1	鱗片 1	
	R	完存 近位部 遠位部			3					
大腸骨	L	完存 近位部 遠位部			1					
	R	完存 近位部 遠位部			(成) 1					
脛骨	R	完存 近位部 遠位部			3		1			
中手骨	L	完存 近位部 遠位部			2・(成) 1 2・(成) 1					キジバト 1
	R	完存 近位部 遠位部	1		3・(成) 1 4・(成) 2 1・(成) 1					
中足骨	L	完存 近位部 遠位部						1	鱗片 1 鱗片 1	
	R	完存 近位部 遠位部								
跗跖骨			1	(成) 1	3			1	1	大型鳥 1
趾骨					11				20	
その他					指骨 L (中間部分) 1、中手骨 L (中間部分) 1・R (中間部分) 1、腕五骨 (L/R不明) 1、脛骨 1		尺骨 (骨幹部) 1	嘴 (下) 1	寛骨 (L) 1・骨体 12・鱗片 1664	

表17 SK-005出土鳥骨数量表

部位	L/R	残存部分	キジ	鳥
脛骨	L	完存 近位部 遠位部		
	R	完存 近位部 遠位部	1	
趾爪	L			
	R		1	
その他				骨体 1、骨片 71

IV AMS法による年代測定

1. 船橋市取掛西貝塚 (5) 出土試料の¹⁴C年代測定

小林謙一・西本豊弘・坂本稔・松崎浩之 (国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループ)

概要

船橋市取掛西貝塚 (5) 出土試料の加速器を用いた年代測定を行ったので、その結果を報告する。試料は2008年に調査現場で小林謙一が採取した。

試料の前処理は、国立歴史民俗博物館年代測定資料実験室が行い、測定は東京大学大学院工学研究系タンデム加速器施設 (MALT) によるものである。測定結果は計測値 (補正) とともに実年代の確率を示す較正年代値を示した。また、その根拠となった較正曲線を示した。また、別に遠部慎が貝塚出土の貝殻の年代測定をおこなっている (本章2.参照)。

今回の年代測定の目的は、この遺跡の年代を調べることであり、有効な測定結果を得ることができた。

i. 測定試料

測定した試料は、CNFBT-C1およびC3とした樹幹状の炭化材が破砕した炭化材片である (出土位置は第8図)。縄文早期熱系土器が出土するSI-002堅穴住居跡覆土中貝層下部灰層出土である。

ii. 炭化物の処理

試料については、注1に記した手順で試料処理を行った。作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定試料実験室において坂本が行った。炭素含有率は良好であった。

試料名	採取量	前処理量	回収量1	燃焼量	回収量2 (CO ₂ 換算量)
CNFBT-C1	332mg	130mg	12.19mg	1.83mg	0.95mg
CNFBT-C3	301mg	101mg	9.48mg	1.73mg	0.97mg

iii. 測定結果と暦年較正

AMSによる¹⁴C測定は同時に調製した標準試料とともに、東京大学大学院工学研究系タンデム加速器施設 (機関番号MTC) で松崎らが行った。

測定結果は、注2に示す方法で、同位体効果を補正した¹⁴C年代、較正年代を算出した。 δ^{13} C値は、すべて加速器による同位体効果補正のための測定であり、試料自体の正確な値とは言えない。以下には参考値として () で記しておく。

ラボコード	試料No	δ^{13} C	error	¹⁴ C年代	error
MTC-11932	CNFBT-C1	(-19.5)	±4.9	9320	±70
MTC-11933	CNFBT-C3	(-18.7)	±4.7	9140	±70

iv. 測定結果の解釈と暦年較正年代の解釈

今回の測定値について、IntCal09の較正曲線を用いた、OxCalに準じて国立歴史民俗博物館今村峯雄がベイズ統計を用いた方法で作成した較正年代算出プログラム (RHCAL3.2) (今村2007) で計算した結果を記す。誤差範囲は 2σ すなわち合計で95.4%の確率で計算する。年代はcal BC (西暦紀元) である。

較正年代は、 2σ の有効範囲で、C1は8745-8340cal BC (10695-10290 cal BP) (95.4%)、C3は8545-8500cal BC (10495-10450 cal BC) (7.6%)、8495-8250cal BC (10445-10200 cal BC) (87.8%)の確率分布である。ややC3の方が新しい炭素14年代となるが、較正年代で見ると、8495-8340cal BCの年代において重なっており、近い年代の所産である可能性がある。これまでの測定結果に照らすと (小林2007)、縄文時代早期燃系紋土器終末から無文・沈線文土器の初め頃に相当する。

本稿の測定成果は、平成20年度科学研究費補助金 (学術創成研究) 「弥生農耕の起源と東アジア炭素年代測定による高精度編年体系の構築—」(16GS0118、研究代表西本豊弘)、平成20年度科学研究費補助金 (C) 「炭素14年代測定を利用した縄文時代の居住期間の研究」(2007～2009年度) (19520662、研究代表者小林謙一) の成果である。

暦年較正については今村峯雄、坂本稔の方法に従う。本稿は、船橋市教育委員会、大成エンジニアおよび石坂雅樹、安孫子昭二、遠部慎各氏のご教示を得ている。

註1 下記の方法で処理した。前処理の前に、アセトンによる洗浄もおこない、油脂分を除去した

(1) 前処理: 酸・アルカリ・酸による化学洗浄 (AAA処理)。

AAA処理として、自動処理器 (Sakamoto et al. 2002) を用い、80°C、各1時間で、希塩酸溶液 (1N-HCl 2回)、アルカリ溶液 (1N-NaOH 5回)、酸処理 (240分以上2回)、純水洗浄 (5回) を行った。

(2) 二酸化炭素化と精製: 酸化銅により試料を燃焼 (二酸化炭素化)、真空ラインを用いて不純物を除去。

(3) グラファイト化: 鉄触媒のもとで水素還元し、二酸化炭素をグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

(4) AMS¹⁴C測定と暦年較正計算方法

年代データの¹⁴C BPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した¹⁴C年代 (モデル年代) であることを示す。¹⁴C年代を算出する際の半減期は、5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差 (1標準偏差、68%信頼限界) である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の¹⁴C/¹²C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。加速器で同時に測定した¹³C/¹²C比により、¹⁴C/¹²C比に対する同位体効果を調べ補正する。¹³C/¹²C比は、標準体 (古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの¹³C/¹²C比) に対する千分率偏差 $\delta^{13}\text{C}$ (パーミル, ‰) で示され、この値を-25‰に規格化して得られる¹⁴C/¹²C比によって補正する。補正した¹⁴C/¹²C比から、¹⁴C年代値 (モデル年代) が得られる。

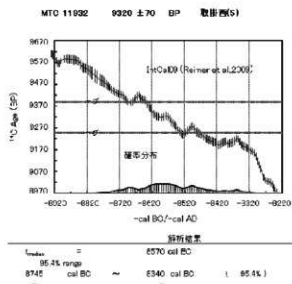
註2 測定値について、以下の方法で較正年代を算出した。

測定値を較正曲線IntCal04 (¹⁴C年代を暦年代に修正するためのデータベース、2009年版) (Reimer et al 2009) と比較することによって暦年代 (実年代) を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、国立

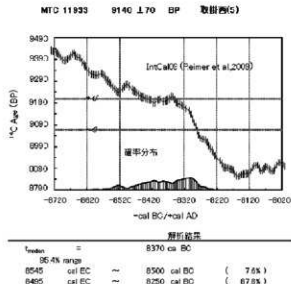
歴史民俗博物館で作成したプログラムRHCcal (OxCal Programに準じた方法) を用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、校正された西暦 cal BCで示す。()内は推定確率である。

参考文献

- 小林謙一2007「縄紋時代前半期の実年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集 国立歴史民俗博物館
 今村峯雄2007「炭素14年代較正ソフトRHC3.2について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集79-88頁
 Reimer, Paula J, et al 2004 IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 cal kyr BP Radiocarbon 46 (3) : 1029-1058.
 M. Sakamoto et al. 2002 An Automated AAA preparation system for AMS radiocarbon dating. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B 223-224: 298-301.
 Reimer P.J. et al. (2009) IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon 51 (4) : 1111-1150.



第34図 CNFBT-C1 較正年代確率密度分布



第35図 CNFBT-C3 較正年代確率密度分布



挿入写真1 CBFBT-C1出土状態 1



挿入写真2 CBFBT-C1出土状態 2



插图写真3 CBFBT-C3出土状态 1



插图写真4 CBFBT-C3出土状态 2

2. 船橋市取掛西貝塚 (5) 貝類の年代測定

遠部 慎

概要

千葉県船橋市取掛西貝塚(5)出土貝類の加速器を用いた年代測定を行ったので、その結果を報告する。試料の前処理は、国立歴史民俗博物館で行い、測定はパレオ・ラボ(PLD)によるものである。測定結果は、計測値(補正)とともに実年代の確率を示す較正年代値を示した。また、その根拠となった較正曲線を示した。今回の年代測定の目的は、本遺跡の貝類利用の年代を調べることであり、特に縄文時代早期貝塚の有効な測定結果を得ることができた。

i. 測定試料

測定した試料は船橋市教育委員会において小林謙一・西本豊弘が採取したヤマトシジミの貝殻2点である。これらの出土地点は、2008年度調査のSI-002堅穴住居跡の貝層の最下層よりの出土である。

ii. 炭化物の処理

分析した貝殻試料はヤマトシジミ2点(CBFT-K1, K2)である。試料である貝の死亡する直前に形成される外縁部の試料を使用した。表面に付着した土壌を超音波洗浄し、1Mの塩酸で溶解させ、炭酸塩や土壌埋没前/後に沈着する不純物を除去した。エッチングを行なった試料を錫製カップに秤量し、二股管で燐酸反応させ、燃焼して酸化された気体を真空ラインに導き、液体窒素および冷却エタノールなどの冷媒を用いて精製した二酸化炭素を鉄粉とともに水素ガスと封入し、10時間600℃にて加熱しグラファイト化し(K1:3.15mg, K2:3.38mg)、Al製のターゲットホルダーに充填し、加速器質量分析(AMS)用試料とした。

PLD-11155(CBFT-K1)の実験状況を示すと、A処理後重量:42.43mg、ガス化重量:26.54mg、炭素含有量:2.84mg、炭素含有率:10.7%、グラファイト重量:0.87mg、グラファイト化率:85.3%。PLD-11156(CBFT-K2)は酸処理で30%程度クリーニングし、A処理後重量:31.27mg、ガス化重量:23.51mg、炭素含有量:2.49mg、炭素含有率:10.2%、グラファイト重量:0.88mg、グラファイト化率:86.3%であった。

iii. 測定結果と暦年較正

AMSによる ^{14}C 測定は、貝殻試料は同時に調製した標準試料とともに、(株)パレオラボ社の加速器施設(機関番号PLD)で行った。測定結果は、註1に示す方法で、同位体効果を補正し ^{14}C 年代、較正年代を算出した。表18に測定結果を示すが、 $\delta^{13}\text{C}$ 値は、すべて加速器による同位体効果補正のための測定であり、試料自体の正確な値とは言えない。表には参考値として()で記しておく。また、貝殻試料の場合は、測定対象となる炭酸塩の多くを海水に溶存する無機炭素から取り込んでいるため、木炭などの大気と同位体平衡になっている資料と比較するために補正が必要となる。海水の場合、海水が深層を約2000年かけてゆっくりと循環している間に、 ^{14}C 供給源である大気上層から遮断されるために深層水で ^{14}C 濃度が薄くなり、それが表層水と混合して ^{14}C 濃度が平均で約400年古くなることが知られて

いる。

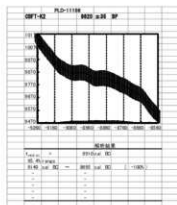
これを「海洋リザーバー効果」(Stuiver et al. 1986)といい、外洋に面した岩礁性のエリアに生息するハイガイやハマグリはこれを考慮しなくてはならない。海洋リザーバー効果には大きな地域差があり、本来ならばそれも補正值に加えねばならない。しかし、日本列島沿岸での海洋リザーバー効果の正確な見積りは未だ予備的な段階である (Yoneda et al. 2000)。ここでは、西日本における¹⁴C濃度が海洋の平均とほぼ等しいと仮定して¹⁴C年代の較正を試み、海洋資料用のデータ (Marine98; Stuiver et al. 1998) を用いて較正¹⁴C年代 (実年代) を推定することにした。また、汽水性のヤマトシジミや河口域のカキについては、海洋リザーバー効果の影響が現時点では推定困難であるので、それを100%と仮定した場合 (仮にR-corrected dateと呼ぶ) と0%とした場合 (R-uncorrected date) を比較した。海洋リザーバーを考慮しない資料については、Intcal09のデータを用いて較正している (Stuiver et al. 1998b, 2009) (第36図)。

表18 取掛西貝塚の¹⁴C炭素年代 (BP) と暦年較正年代 (calBC)

試料番号	測定機関番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	¹⁴ C 炭素年代 (BP)			暦年較正年代 (Cal BC)	確率分布 (%)
CBFT-K1	PLD-11155	(-10.38 ± 0.18)	9750	±	35	9290-9185	95.4%
(Marinical)						9070-8625	95.4%
CBFT-K2	PLD-11156	(-7.96 ± 0.17)	9820	±	35	9320-9245	95.4%
(Marinical)						9140-8695	95.4%

iv. 測定結果の解釈と暦年較正年代の解釈

今回の測定で得られた年代値は、CBFT-K1が9750±35BP、K2が9820±35BPであった。本遺跡の位置する関東地域では、縄文時代早期の貝類の年代測定値としては、夏島貝塚の第1貝層 (夏島II式) のカキを測定した9450±400BP、木炭を測定した9240±500BPがよく知られる (杉原1951, crane&Griffin1960)。この他にも、いくつかの測定例があるが、いわゆる縄文時代前半期の貝類の年代測定例は少なく、早期前半の特に燃系土土器期の年代測定例は少ない。



第36図 取掛西貝塚の較正年代 (上intcal09下marinecal09)

そこで、本貝塚の年代を決定するうえで、出土した土器群の型式比定が大きな参考となる。基本的には本遺跡では大浦山式、天矢場式、東山式、花輪台式がまとめて出土している。これらは、いわゆる撚糸文土器様式に該当する。撚糸文系土器群は、井草Ⅰ式/井草Ⅱ式・大丸式/夏鳥式/稲荷台式/大浦山式・稲荷原式/東山式/花輪台式/平坂式と大まかに変遷する、と理解されている(原田2008)。ないしは、系統関係を重視し、井草Ⅰ式/井草Ⅱ式/夏鳥式/稲荷台式/稲荷原式・花輪台Ⅰ式古/東山式a・花輪台Ⅰ式新/大浦山式Ⅰ・東山式b・花輪台Ⅱ式/平坂式・東山式c・天矢場式(中村2012)や夏鳥/稲荷台古/稲荷台新・稲荷原古/稲荷原新・大浦山Ⅰ・花輪台Ⅰ/東山・平坂古・花輪台Ⅱ(宮崎1991)とする案もある。ここでは大まかに、井草Ⅰ式/井草Ⅱ式/夏鳥式/稲荷台式/大浦山・稲荷原/平坂式・天矢場式は前後関係にあることを確認し、花輪台式・東山式に関しては、補足的にとらえておきたい(註2)。

これまでに年代測定値の得られた撚糸文期の年代値としては、江の島公園内遺跡群の稲荷台式9560±50BP(土器内)、9510±50BP(炭化材)(小林2007)、稲荷台式期の、木の根柢美遺跡の9050±230BP(中村1999)、大浦山式-平坂式期(押型文土器?)の年代としては、8705±45BP、8735±45BP(パレオ・ラボ2006)、8955±45BP(工藤2009)などが報告されている。本遺跡から得られた大浦山式期の住居址から得られた炭化材の年代値は9320±70BP、9140±70BPであり(小林報告参照)、土器型式と、これまでに得られている年代測定値の関係性は、きわめて調和的と判断しておきたい。

それを踏まえ、関東地方周辺の海洋リザーバー効果を大きく見積もって400年程度と仮定した場合(Yoneda2000,2004)、取掛西貝塚の炭化材および貝類の年代値は、調和的な可能性が高い(第36図)。関東地方で縄文時代早期前半の貝類の年代値としては、夏鳥貝塚の他、西ノ城貝塚の夏鳥式貝層(ヤマト

科学研究費補助金「先史時代における貝塚出現期の年代学的研究」(課題番号19800058)の成果の一部を用いている。

暦年較正については今村峯雄、坂本稔の方法に従う。本稿作成にあたり、船橋市教育委員会には試料調査の協力をいただき、西本豊弘先生をはじめとする、国立歴史民俗博物館・学術創成研究グループ、犬島貝塚調査保護プロジェクトチーム、早稲田大学會津八一記念博物館、小林謙一、中村信博、山田俊輔の各位には、試料調査や位置づけについて、ご教示、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げたい。

註1 貝類については下記の方法で処理した。

(1)前処理：酸による化学洗浄(A処理)。

A処理として、80℃、各1時間で、希塩酸溶液(1N-HCl)で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去(2回)を行った。

(2)二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を燃焼(二酸化炭素化)、真空ラインを用いて不純物を除去。

(3)グラファイト化：鉄触媒のもとで水素還元し、二酸化炭素をグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

(4)AMS¹⁴C測定と暦年較正計算方法

年代データの¹⁴C BPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した¹⁴C年代(モデル年代)であることを示す。¹⁴C年代を算出する際の半減期は、5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差(1標準偏差、68%信頼限界)である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の¹⁴C/¹²C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した¹³C/¹²C比により、¹⁴C/¹²C比に対する同位体効果を調べ補正する。¹³C/¹²C比は、標準体(古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの¹³C/¹²C比)に対する千分率偏差 $\delta^{13}\text{C}$ (パーミル、‰)で示され、この値を-25‰に規格化して得られる¹⁴C/¹²C比によって補正する。補正した¹⁴C/¹²C比から、¹⁴C年代値(モデル年代)が得られる。

註2 測定値について、以下の方法で較正年代を算出した。

測定値を較正曲線IntCal04(¹⁴C年代を暦年代に修正するためのデータベース、2009年版)(Reimer et al 2009)と比較することによって暦年代(実年代)を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数値的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、国立歴史民俗博物館で作成したプログラムRHCAL(OxCal Programに準じた方法)を用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦 cal BCで示す。()内は推定確率である。

(註2) 中村信博氏より当該期の土器について、詳細な私信をいただき、各種文献および資料についてご教示を得た。特に、鶴崎貝塚出土の燃糸文系土器群が本遺跡や沖ノ島遺跡などより、先行するという見解は、きわめて重要と考える。鶴崎貝塚については、西ノ城貝塚→鶴崎貝塚→城ノ台貝塚という指摘(鈴木2003)もあり、再検討の余地があるものと考えておきたい。

(註3) 年代測定値の誤差範囲が ± 200 を超える事例(ex夏島貝塚)については、誤差があまりに大き

いため、検討を省いている。

参考文献

- 岡本 勇1989「縄文文化の起源と貝塚」『縄文人と貝塚』pp.57-86、六興出版
- 小林謙一2007「縄文時代前半期の実年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集、pp.89-133、国立歴史民俗博物館
- 小林謙一2011「栃原岩陰遺跡「下部」出土土器の炭素14年代について」『佐久考古通信』111、pp.6-7、佐久考古学会
- 工藤雄一郎・小林真生子、百原新・能城修一、中村俊夫・沖津進、柳瀬清一・岡本東三2009.3「千葉県沖ノ鳥遺跡から出土した縄文時代早期のアサ果実の14C年代」『植生史研究』17-1、pp.27-31、植生史学会
- 杉原荘介1962「神奈川県夏島貝塚出土遺物の放射性炭素による年代決定」『駿台史学』12、pp.119-122、駿台史学会
- 杉原荘介・芹沢長介1957「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」明治大学文学研究所
- 鈴木正博2003「WANTED！夏島貝塚のヤマトシジミ貝層」『利根川』24・25号、pp.342-348、利根川同人
- 中村俊夫1989「貝殻を用いた14C年代測定」『千葉県文化財センター研究紀要』19、pp.23-39、千葉県文化財センター
- 中村信博2012「大田原市（旧湯津上村）品川台遺跡出土の燃糸文系土器群」『那須文化研究』第25号、pp.1-16、那須文化研究会
- 野内秀明1990「三浦半島における縄文時代の14C年代測定値について」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』第35号、pp.59-71、横須賀市人文博物館
- 原田昌幸2008「燃糸文系様式」『縄文土器総覧』pp.112-121、アムプロモーション
- パレオ・ラボAMS年代測定グループ2006「放射性炭素年代測定」『千葉県館山市沖ノ鳥遺跡第2、3次発掘調査概報』pp.28-30、千葉大学文学部
- 宮崎朝雄1991「夏島式土器及び稲荷台式土器について」『埼玉考古学論集』pp.193-220、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 渡辺直徑1966「縄文および弥生時代のC14年代」『第四紀研究』第5巻第3・4号、pp.157-168、第四紀学会
- Crane, H. R. & J. B. Griffin (1958). University of Michigan Radiocarbon Dates III. Science 128, 1117-1123.
- Crane, H. R. & J. B. Griffin (1960). University of Michigan Radiocarbon Dates V. Radiocarbon Supplements, Vol.2, 31-48
- Reimer, Paula J. et al 2004 IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 Cal Kyr BP Radiocarbon 46(3), 1029-1058 (30).
- Reimer P. J., Baillie M. G. L., Bard E., Bayliss A., Beck J. W., Blackwell P. G., Bronk Ramsey C., Buck C., Burr G. S., Edwards R. L., Friedrich M., Grootes P. M., Guilderson T. P., Hajdas I., Heaton T. J., Hogg A. G., Hughen K. A., Kaiser K. F., Kromer B., McCormack G., Manning S., Reimer R. W., Richards D. A., Southon J. R., Talamo S., Turney C. S. M., van der Plicht J., Weyhenmeyer C. E. (2009) IntCal09 and Marine09 radiocarbon calibration curves, 0-50,000 years cal BP. Proceedings of 20th International Radiocarbon Conference. Radiocarbon 51, 1111-1150.
- Stuiver, M., G. W. Pearson & T. Braziunas (1986). Radiocarbon age calibration of marine samples back to 9000 cal yr BP. Radiocarbon 28, 980-1021.
- Stuiver, M., P.J. Reimer, and T.F. Braziunas (1998a). High-precision radiocarbon age calibration for terrestrial and marine samples. Radiocarbon 40, 1127-1151.
- Stuiver, M., P.J. Reimer, E. Bard, J.W. Beck, G.S. Burr, K.A. Hughen, B. Kromer, G. McCormack, J. Van der Plicht,

- and M. Spurk (1998b) . INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon 40, 1041-1083.
- Stuiver, M., G. W. Pearson & T. Braziunas (1986) . Radiocarbon age calibration of marine samples back to 9000 cal yr BP. Radiocarbon 28, 980-1021.
- Stuiver, M., P.J. Reimer, and T.F. Braziunas (1998a) . High-precision radiocarbon age calibration for terrestrial and marine samples. Radiocarbon 40, 1127-1151.
- Stuiver, M., P.J. Reimer, E. Bard, J.W. Beck, G.S. Burr, K.A. Hughen, B. Kromer, G. McCormac, J. Van der Plicht, and M. Spurk (1998) . INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon 40, 1041-1083.
- Yoneda, M., H. Kitagawa, J.v.d. Plicht, M. Uchida, A. Tanaka, T. Uehiro, Y. Shibata, M. Morita, and T. Ohno (2000) . Pre-bomb marine reservoir ages in the western north Pacific: Preliminary result on Kyoto University collection. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B 172, 377-381.
- Yoneda, M., Y. Shibata, A. Tanaka, T. Uehiro, M. Morita, M. Uchida, T. Kobayashi, C. Kobayashi, R. Suzuki and K. Miyamoto (2004) . AMS 14C measurement and preparative techniques at NIES-TERRA. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B 223-224, 116-123.

3. 第IV章まとめ 一般橋市取掛西貝塚 (5) 出土試料の¹⁴C年代測定結果について

小林謙一

船橋市取掛西貝塚 (5) 出土の炭化材、種実、貝殻について、AMS法による炭素14年代測定結果を得た。すべて船橋市教育委員会による遺跡発掘調査時から整理時にかけて国立歴史民俗博物館年代測定研究グループによって採取・分析されてきた試料で、炭化材については小林、種実については西本豊弘・住田雅和、貝殻については遠部慎がそれぞれ別途に測定し報告をおこなっている。現時点においても、貝殻やツノガイ製装身具などについて名古屋大学一本絵理氏に委託し測定を重ねているところであるが、ここで現時点までの年代的なまとめをおこなっておきたい。

i. 測定試料と結果

測定試料は表19に示すように、貝層最下層出土貝殻ヤマトシジミ2点 (CBFT-K1・K2) (遠部報告)、貝層下部灰層出土炭化材2点 (CNFBT-C1・C3) (小林報告) および灰床炉出土種実ミズキ核1点 (TKN-S-1) ((株) パレオ・ラボ報告) のSI-002住居跡出土の5点である。AMS測定は、貝殻及び種実は(株) パレオ・ラボ、炭化材は東京大学院工学研究系タンデム加速器施設 (MALT) に委託した。試料の前処理状況および測定状況と測定結果の較正年代については、貝殻及び炭化材については個別に報告したが、種実についてはここでAAA前処理および二酸化炭素燃焼の処理について(株) パレオ・ラボの報告を基に記し、結果についてIntCal09をもとに今村峯雄の較正年代計算プログラムによって求めた較正年代を記す。TKN-S-1は、超音波洗浄後、塩酸 (1.2N)、水酸化ナトリウム (1.0N)、塩酸 (1.2N) でAAA処理をおこなった結果4.95mgの試料を回収し、重量比で60.1%の試料を回収した計算となる。すべて燃焼し二酸化炭素にガス化した結果、3.09mg分の炭素を回収しているので、二酸化炭素化精製時の炭素含有率は62.4%となり、炭化種実としては平均的な値で年代測定に良好な試料といえる。

較正年代は、第38図に示すように、 2σ の範囲で8540～8510calBCに8.9%、8485～8310calBCに86.4%の確率で含まれる較正年代となり、炭化材の測定結果とおおよそ整合的な結果となっている。

表19 測定試料一覧表

採取試料名出力	細別	出土区	ラボ	コード	C14	同位体分別%
CBFT-K1	貝殻 ヤマトシジミ	2008年度, SI-002住, 貝層最下層	PLD	11155	9750 ± 35	(-10.4 ± 0.18)
CBFT-K2	貝殻 ヤマトシジミ	2008年度, SI-002住, 貝層最下層	PLD	11156	9820 ± 35	(-8.0 ± 0.17)
CNFBT-C1	炭化材 樹幹細片	2008年度, SI-002住, 貝層下部灰層	MTC	11932	9320 ± 70	(-19.5 ± 4.9)
CNFBT-C3	炭化材 樹幹細片	2008年度, SI-002住, 貝層下部灰層	MTC	11933	9140 ± 70	(-18.7 ± 4.7)
TKN-S-1	種実 ミズキ核	2008年度, SI-002住, 灰床炉覆土中	PLD	21550	9210 ± 30	(-23.1 ± 0.19)

ii. 年代的考察

今回の試料は、その試料としての性格から大きく2つのグループに分かれる (第39図)。貝層中出土の貝殻試料 (K1・K2) と、貝層下及び炉出土の陸生植物由来の試料 (C1・C3・S1) である。貝殻試料は、陸生植物由来の試料よりも古い炭素14年代が得られることが知られている。海洋の深層水は、約

1500年を周期に循環しているので、深層には古い炭素がとけこんでいる。一般的に海洋水中の ^{14}C 濃度は、大気中に比べて低い。海産物は、陸上植物よりも平均で400年ほど古い ^{14}C 年代となる。これを海洋の炭素リザーバー効果、略して海洋リザーバー効果と呼ぶ。貝などの暦年較正では、海洋リザーバー効果補正において表層海洋水の平均的な値（グローバルリザーバー効果）を見込んだmarine09を用いるが、正確にはローカルリザーバー効果（ ΔR 値）を加味する必要がある。試料の種類（例えば人骨など海産物がある程度蓄積する場合）や、出土地の地理的位置、例えば緯度によってローカルリザーバー効果（ ΔR 値）に差異が大きく、どの程度見込むかは難しい。今回測定した試料は河口付近の淡水から汽水域に生息すると予測されるヤマトシジミであり、ハマグリ・ハイガイ等の汽水域の貝殻と比べ R 値が小さいことが予測されたが、遠部報告にあるように、ほぼ同一時期と考えられる貝層下部灰層出土の炭化材であるC1・C3と比べると、430～680炭素年（ ^{14}Cyr ）ほど貝殻の方が古いという値となり、同一貝層出土の貝殻と土器付着物・貝殻試料などとの間で400年～500炭素年（ ^{14}Cyr ）の差が認められる東日本の貝塚遺跡での状況と同様な結果となっている（例えば小林ほか2005）。時代が異なるが船橋低地における貝殻試料（イタボガキ・アサリ・ハマグリ）の ^{14}C 年代測定をおこなった結果（小林・坂本ほか2011）、天沼遺跡6T I層～III層における中世段階の干潟が形成されていた時期の14世紀頃のアサリの炭素14年代、1T II層～III層の古墳時代前期以前に形成された砂州上に古墳時代中期居住が確認される層で古墳時代後期頃に相当するイタボガキの炭素14年代、船橋駅高架下自然貝層の自然貝層では縄文時代中期～後期にかけてのハマグリ炭素14年代が測定されたが、 ΔR 値をどの程度見込むかが不明な現時点では、船橋低地の形成過程や変遷を精密に時期的に位置づけることは難しい（小林・坂本ほか2011）。

縄文時代および各時代を通じた日本列島付近における海洋リザーバー効果の影響の度合いを明らかにしていくためにも測定例を増していく必要がある。

遺跡形成時期を反映していると思われる陸生植物由来の炭化材・種実によってSI-002住居跡の使用・廃絶時期を検討する。炭化材は樹幹であり小片であって、厳密には樹幹最外縁の年輪ではないため、試料を採取した部位により樹木が形成した年輪分、伐採年よりも古い年代を示す可能性があるが、本試料は樹種同定をおこなっていないものの、下部灰層において想定される動物骨を用いた儀礼的行為に伴う燃焼の際の燃料材の細片と思われ、例えば構築材など100年輪を超えるような大樹の内側部分の試料であるために古く測定されるような大幅な古木効果は考えにくい。また、層位的に見て住居廃絶後にさほどの時間差をえずに儀礼的行為をおこなった段階に残されたものと考えられる。一方、灰床中に残されていたミズキ核は、住居居住中に炉の中に残されたか住居廃絶直後に炉を埋め立てた灰・貝殻混じりの覆土中に混ざり込んだ種実片であり、住居使用時～廃絶直後の時間情報を持つと期待できる。種実は1・2年は貯蔵されることもありえるが、ほぼ採取された年代を反映すると考えられ、年代を決める際には有効である。ただし、経験則から包含層や住居覆土などの層位的試料の中には後からの混在と考えられる明らかに新しい種実が混ざることもある。種実自体の形状から考えて、新しい木の実が軋がり込んできたり、小動物によって土中に蓄えられることはあり得るだろう。その点、本試料は床面の炉内に遺存しており、バックされた状態で残されていたことからきわめてよい試料といえるだろう。測定結果を見ると、貝層下部灰層の炭化材2点はやや ^{14}C 年代で差があったが、測定誤差が 1σ で 70^{14}C yr あり、炭化材の年代値の測定誤差を考慮すると、C1は9250～9390 $^{14}\text{C BP}$ 、C2は9070～9210 $^{14}\text{C BP}$ の範囲に含ま

れると理解でき、市内出土種実のSI1の9180～9240¹⁴C BPと測定値としてほぼ重なると考えられる。よって、SI-002住居跡の廃絶直後の較正年代としては、8485～8310calBC (10435～10260cal BP)の年代の中に含まれると考えるともっとも可能性が高いといえる。

近年の縄紋時代早期年代測定結果では、長野県北相木村栃原岩陰遺跡下部出土の表裏縄紋土器付着炭化物5点の測定結果で9560～9680±40¹⁴C BPとなっている(藤森英二他2011・小林2011)。南相木村教育委員会が大師遺跡12号土坑出土格子目状押型文土器付着物を測定し、9240±40¹⁴CBPの値が出ている(南相木村教育委員会2010)。IntCal09で算出すると、8590calBC (0.4%)、8570-8310calBC (94.9%)となる。長野県飯田市美女遺跡ではSB14住居出土押型紋土器立野式土器内面付着物2点が9285±25および9310±30¹⁴CBP、SK525土坑出土草創期葛原沢Ⅱ式土器外面付着物が11050±30¹⁴CBPの結果である(遠部ほか2008)。新潟県入広瀬村黒姫洞窟の出土土器付着物および共伴炭化物試料の測定から黒姫洞窟の土器付着炭化物の年代測定から、室谷下層併行の土器(10365±50¹⁴CBP)→撚糸紋土器(10060±60¹⁴CBP、9850±40¹⁴CBP、9720±40¹⁴CBP)→沈線文土器(9305±25¹⁴CBP)という推移が読み取れる(小林ほか2004)。東海地方も遠部慎氏らが測定を進め、静岡県三の原遺跡多縄紋土器で10160±50、10110±80¹⁴CBP、東大室クスレ遺跡の押型文土器の古い段階が8810±45、8715±45、9005±45¹⁴CBPである(遠部ほか2012)。

筆者の年代観をもとにすると、縄紋時代草創期と早期前半の年代は以下のようになる(小林2007)。calBP較正年代で1950年を起点として何年前かと数える。

草創期(無文、隆線文～多縄紋) 15700～11600年前cal BP

早期(撚糸紋～条痕紋) 11500～7000年前cal BP

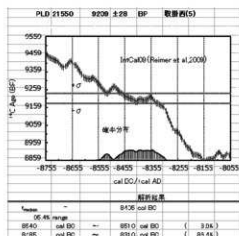
撚糸紋系 11500～10500年前cal BP

(稲荷台式) 11090～10690年前cal BP

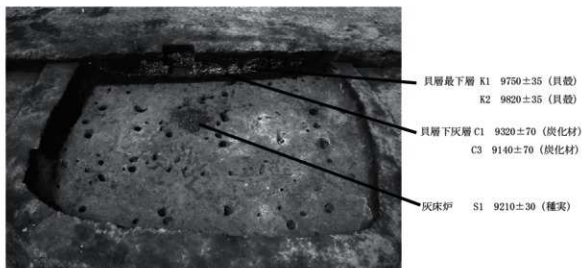
無紋・沈線文系 10450～(8500ころ)年前cal BP

取掛西貝塚SI-002住居跡の炭化材・種実の測定結果(平均的な値としてミズキ核の9210±30¹⁴CBP、較正年代で10435～10260cal BPころの年代)から推定される年代的位置づけは、上述のこれまでの小林の測定研究(小林2007)を参照すると、縄紋時代早期前半撚糸紋系土器群後葉の直後の年代で無文土器の頃に含まれる年代であり、大浦山式土器期の年代として基準となる年代になろう。

第38図 灰床炉出土ミズキ(TKN-S-1)測定結果の較正年代確率分布



第39図 測定試料出土層位



参考文献

- 今村峯雄2007「炭素14年代較正ソフトRHC3.2について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集国立歴史民俗博物館
遠部慎・宮田佳樹・小林謙一2008「飯田市美女遺跡の土器付着物の炭素14年代測定」『飯田市美術館研究紀要』18
- 遠部慎2009「上黒岩遺跡の押型文土器の炭素14年代測定」『愛媛県上黒岩遺跡の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第
154集
- 遠部慎・宮田佳樹・小林謙一2012「東海地方における縄文時代草創期から早期の土器の炭素14年代測定」『国立歴史民俗
博物館研究報告』第172集
- 小林謙一・坂本稔・尾崎大真・新免歳靖2004「黒姫洞窟遺跡出土土器付着物の¹⁴C年代測定」『黒姫洞窟遺跡—第1期発
掘調査報告—』新潟県・入広瀬村教育委員会 魚沼地域洞窟遺跡調査
- 小林謙一・坂本稔・松崎浩之2005「稲荷山貝塚出土試料の¹⁴C年代測定—層位的出土状況の分析と海洋リザーバー効果の
検討のために—」『縄文時代』第16号、縄文時代文化研究会
- 小林謙一2007「縄文時代前半期の実年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集国立歴史民俗博物館
- 小林謙一・坂本稔・道上文2011「船橋低地における埋蔵文化財調査出土貝類の炭素14年代測定」『飛ノ古史跡公園博物館
紀要』第8号、船橋市飛ノ古史跡公園博物館
- 小林謙一2012「栃原岩陰遺跡「下部」出土土器の炭素14年代について」『佐久考古通信』111、佐久考古学会
- 藤森英二ほか2011『佐久考古通信』111、佐久考古学会
- 南相木村教育委員会2010『南相木村大師遺跡2009年発掘調査の概要』

V 総括

今回は紙面の都合上、第二章 検出された遺構、第三章 取掛西貝塚の動物遺体について、第四章 AMS法による年代測定を掲載した。残りの遺物関係、第二～IV章の補足については次年度以降に調査報告書として刊行する予定である。

今回の調査で船橋市では最古となる貝塚の検出、現在の時点で国内最古の動物儀礼跡となる動物骨集中箇所検出など非常に貴重な調査成果をあげることができた。第二章まとめてもふれたが船橋市内の縄文時代早期に属する遺跡の調査事例は決して多くない。特に燃糸文期の貝塚の検出は船橋市内では初めてである。しかも東京湾水系に位置しているにも関わらず汽水系のヤマトシジミを主体とするもので後出の条痕文期の飛ノ台貝塚と大きな違いを見せている。取掛西貝塚（5）調査地点SI-002の年代測定結果では8485～8310calBCの年代に含まれる可能性が高いことが示されており（第四章参照）、今回の調査まで市内最古の貝塚であった飛ノ台貝塚（野島式期～茅山下層式期：6470-6000calBC）（小林・坂本2011）より約2000年遡る結果となった。この約2000年の間に自然環境の変化、地形の変化なども考えられる。ヤマトシジミからハイガイ・シオフキへの変化は内陸的な地形から内湾的な地形への変化の現れと考えられる。8485～8310calBC頃の取掛西貝塚の取り巻く環境を少しでも復元してゆくことが当時そこに暮らした人達の生活を復元する一歩であると考えられる。

次年度以降に調査報告書として刊行する遺物関係については出土土器の問題（無文土器群、大浦山式土器）、骨角器の問題、2000点を超えるツノガイ類貝製品の問題などがある。これらの遺物に関してできるだけデータをオープンにし、今後の調査・研究の一助になるように努めたい。尚、発掘調査時にSI-002竪穴住居跡南北セクションの貝層を剥ぎ取り飛ノ台史跡公園博物館に展示をしている。

今回一部であるが発掘調査報告書として刊行できるのは発掘調査当時から整理作業までご指導いただいた国立歴史民俗博物館教授西本豊弘先生、中央大学准教授小林謙一先生のお力と短い発掘調査期間の間に大きな成果をあげていただいた蒲明男氏の努力によるところが大きい。

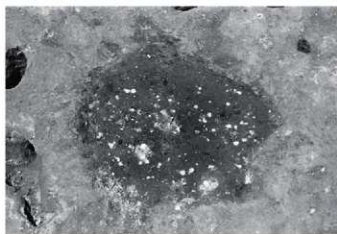
参考文献

小林謙一・坂本俊2011「船橋市飛ノ台貝塚出土土料の炭素14年代測定」『飛ノ台史跡公園博物館紀要』第8号、船橋市飛ノ台史跡公園博物館

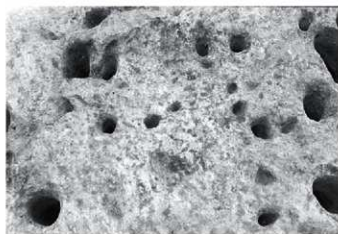
写 真 图 版



SI-002完掘状況



SI-002炉跡検出状況



SI-002炉跡完掘状況



SI-002動物骨集中箇所1



SI-002動物骨集中箇所2



SI-002具層検出状況



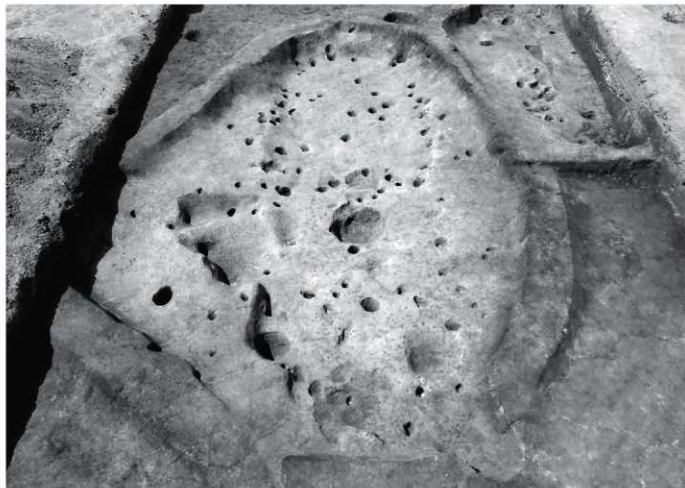
SI-002動物骨集中箇所検出状況



SI-003完掘状況



SI-003貝層検出状況



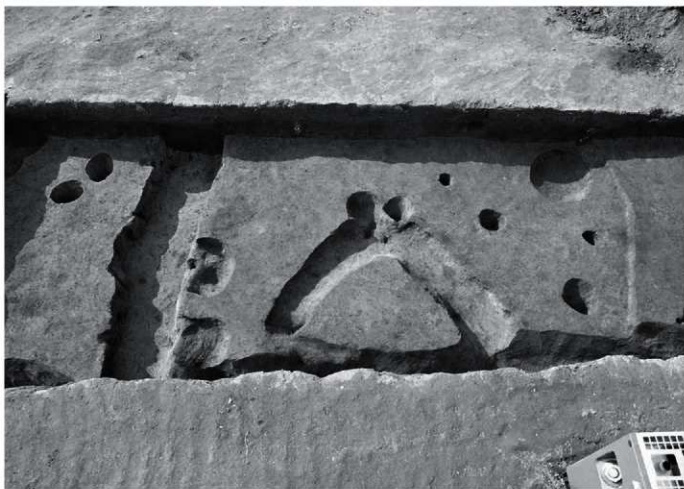
SI-004完掘状況



SI-004貝層検出状況



SI-004遺物出土状況



SI-006、SD-007完掘状況



SI-008A、SK-008B・C、SH-151完掘状況



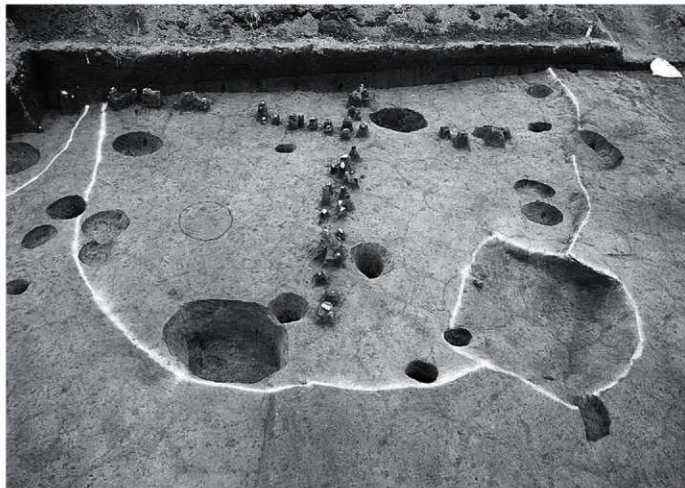
SI-008A、SK-008B・C遺物出土状況1



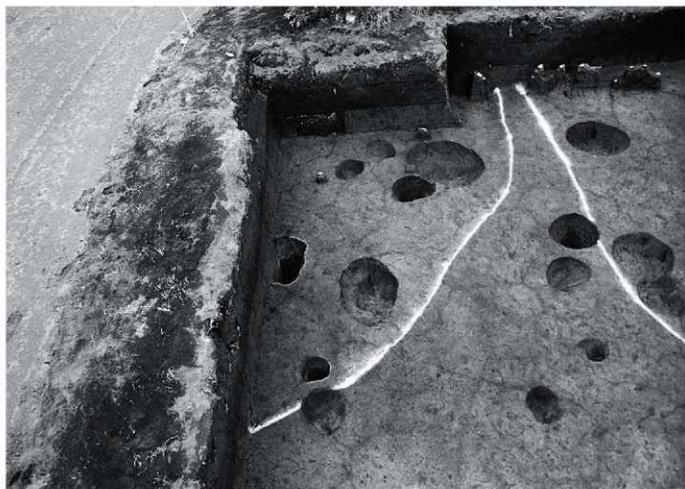
SK-008B遺物出土状況2



SI-009、SH-069完掘状況



SI-010・SK-014・016完掘状況



SI-011・SH-058・059・169～171完掘状況



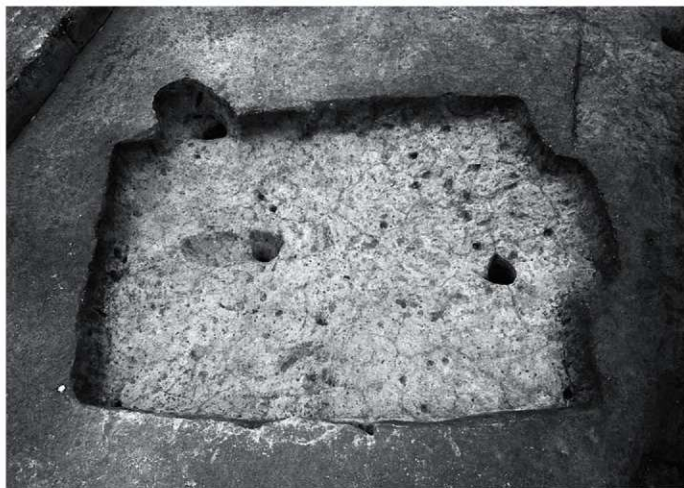
SI-012完掘状況



SI-015完掘状況



SI-001完掘状況



SI-001掘り方



SK-005・114完掘状況



SK-005・114遺物・貝層検出状況



SK-013遺物出土状況



SK-016完掘状況



SK-026完掘状況



SK-028遺物出土状況



SK-060完掘状況



SK-080完掘状況



SK-131完掘状况



SK-131遺物出土状况



SK-172完掘状况



SK-172遺物出土状况



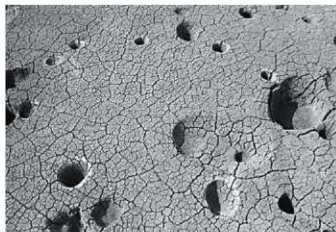
SK-047完掘状况



SK-161完掘状况



SK-122完掘状况



SH-138他完掘状况



調査区北西側完掘状況 (SH-156他)



SD-007完掘状況 (SH-021他)



調査区中央部完掘状況1 (SH-159他)



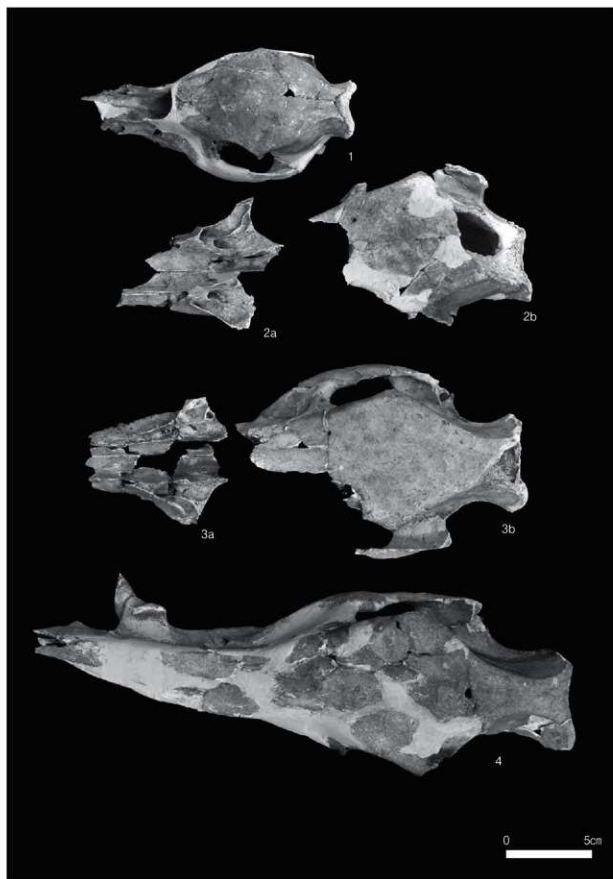
調査区北側完掘状況 (SH-146他)



調査区南側完掘状況 (SK-107他)



調査区中央部完掘状況2



1 幼獣 (0425)、2 若獣 (0453)、3 成獣 (0473)、4 成獣 ♂ (0536)

動物骨集中箇所のイノシシ頭蓋骨 1



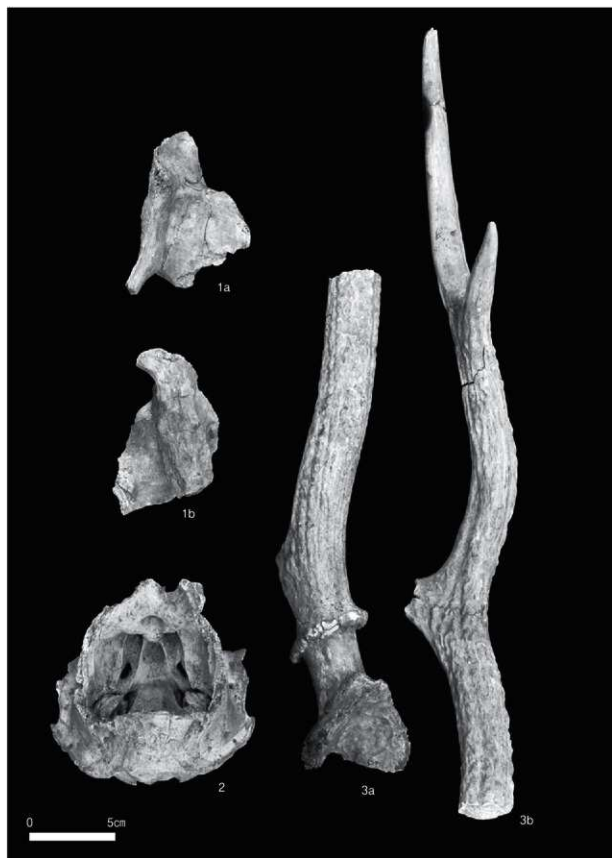
a 上面観、b 口蓋骨面

動物骨集中箇所のイノシシ頭蓋骨2 (0536)



1 a 上面観 ♂ (0509)、1 b 口蓋骨面 (0509)、2 焼けた後頭部 (0523)

動物骨集中箇所のイノシシ頭蓋骨 3



1 a 右側頭蓋骨 ♂ (0518)、1 b 左側頭蓋骨 ♂ (0518)、2 後頭部切断品 ♂ (0490)
3 a・b 頭蓋骨と角 (0527) 角は焼けている。

動物骨集中箇所のシカ



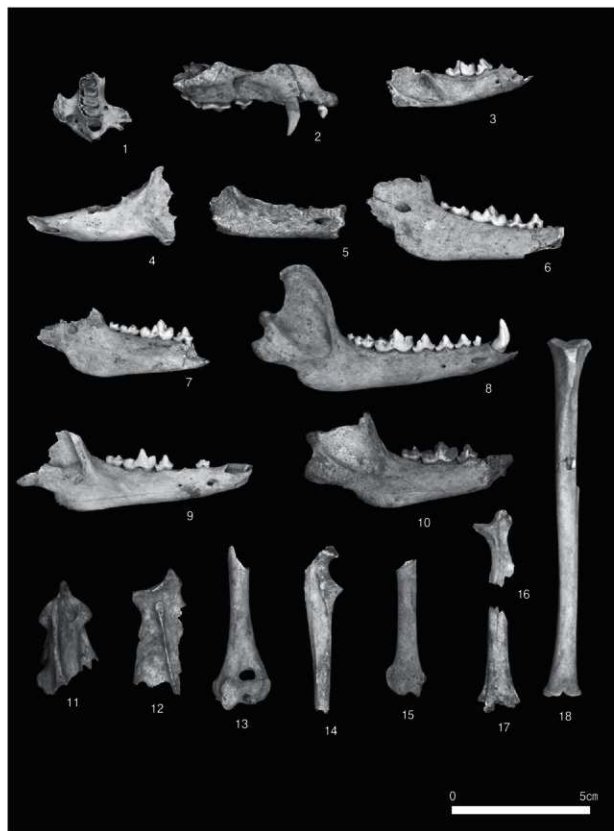
1～4 下顎骨、5 肩甲骨、6 上腕骨遠位部、7 尺骨、8 尺骨と橈骨が癒着したもの
 9 寛骨、10 大腿骨遠位部、11 踵骨、12 距骨 (1・2・4～10・12は右側、3・11は左側)

SI-002貝層出土のイノシシ



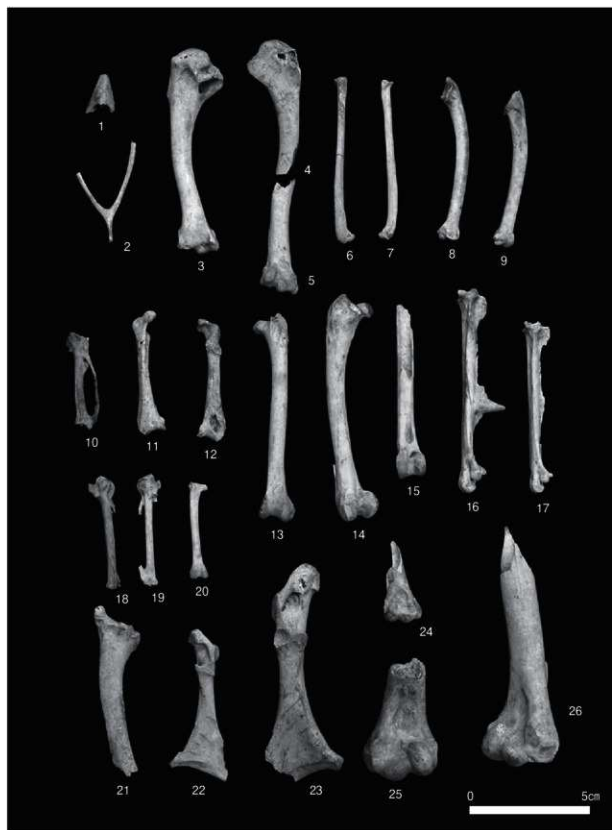
1 下顎骨、2 第2頸椎、3 腰椎、4 肩甲骨、5 上腕骨近位部、6 上腕骨遠位部、7 橈骨、
8 尺骨、9 寛骨、10 大腿骨遠位部、11 脛骨(幼獣)、12 角と角突起(1・5～11は左側、4は右側)

SI-002具層出土のシカ



1・4・16～18 ノウサギ (1 上顎骨、4 下顎骨、16 肩甲骨、17・18 脛骨)
 5 アナグマ (下顎骨)、2・3・6～15 タヌキ (2 上顎骨、3・6～10 下顎骨、11 第2頸椎、12 肩
 甲骨、13 上腕骨遠位部、14 尺骨、15 桡骨)
 (1・4・6・7・12・13・17・18は左側、2・3・5・8～10・14～16は右側)

SI-002貝層出土の中型獣



1～17 キジ類 (1 上嘴骨、2 鎖骨、3～5 上腕骨、6・7 桡骨、8・9 尺骨、10 中手骨、11・12 鳥口骨、13・14 大腿骨、15 脛骨、16 中足骨 ♂、17 中足骨 ♀) 18～20 カモ中小型 (18・19 中手骨、20 大腿骨)、21・22 ヒシクイ (21 肩甲骨、23 鳥口骨)、22・24 カモ大型 (22 鳥口骨、24 上腕骨)、25・26 コハクチョウ (上腕骨)

報告書抄録

書名	取掛西貝塚 (5) I							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	石坂雅樹・西本豊弘・小林謙一・坂本稔・松崎浩之・遠部慎							
編集機関	船橋市教育委員会 生涯学習部文化課埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒274-0805 千葉県船橋市二和東5丁目32番17号 TEL.047-449-7153							
発行年月日	西暦 2013年3月29日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
取掛西貝塚 (5)	千葉県船橋市 飯山満町1丁目 1381番2ほか	12204	025-5	35度 42分 59秒	140度 00分 46秒	20080602 ～ 20080730	472.19	宅地造成
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
取掛西貝塚 (5)	集落跡 貝塚	縄文時代 平安時代 平安時代以降	竪穴住居跡 10軒 土坑 45基 土坑墓 1基 焼土跡 1基 ピット 114基 包含層 1箇所 竪穴住居跡 1軒 溝状遺構 1条	縄文土器、石器、 骨角器、貝製品 土師器、須恵器	特になし			
<p>今回の調査では船橋市で最古となるヤマトシジミを主体とする貝層が検出された。また、SI-002からはイノシシ・シカの頭蓋骨の集中箇所が検出され、現在のところ日本最古の動物儀礼の跡である。</p>								

千葉県船橋市

取掛西貝塚（5）I

発行日	平成25年3月29日 令和3年3月31日 第2版
発行者	船橋市教育委員会 〒273-8501 千葉県船橋市湊町2-10-25
編集者	船橋市教育委員会 文化課埋蔵文化財調査事務所 〒274-0805 千葉県船橋市二和東5-32-17 TEL047-449-7153 FAX047-449-6369
印刷	株式会社 総合印刷新報社
